

なし。電燈は一秒時間三十五の割合にて來らば區別し得べきも其割合少しく大ならんには唯一の感覺を経験すべきのみ。之を額に通せば一秒間六十の割合にて來るも尙善く區別するを得。而して跳反力の最少なる者を視官となす。是は末端機關の性質にて説明せらるべし。燦然たる發光體を見たる後には、眼を閉つるも猶後像の殘るあり。故に新印象は全く空虚なる場所を發見するを得ずして、前印象の殘果と混淆するに至る。今交互に黑白の二色を以て染めなしたる平圓板を極めて迅速に廻轉せば諸印象は皆混和すべく、一秒時間殆んど二十四個の印象を來さんやうに廻轉しなば、灰白色の感覺を結果せむ。又暗中松火を取りて圓形に廻しなば輝々たる一環を現はすべし。其廻轉遲緩なるときには明に個々別々の感覺を見るべく、少しく速度を増加するときには單に燦爛を見るべきのみ。更に迅速にせば各印象は合して一感覺とならむ。

盲を患へたりしものあり。病中には度々往來せし市街をば治療后通行することを甚だ不快に感じたりといふ。是數多の物體及び人馬の迅速なる運動が、其人の視覺を混亂して遂に何物をも見ること能はざらしむるに基けり。即ち前に見たる物より來る印象未だ消えざるに諸印象續々として入り來り爲に後の物體が新印象を喚起するを得ざるに由るなり。此場合に於て種々なる印象は全く混淆せられたるにあらざして、明かなる傾解を得ざる程の混沌を生じたるなり。要するに感覺の明瞭ならんには、須く意識に於て或る連續の割合を注意せざるべからず。

感覺の起らんには音に多少の時間なかるべからざるのみならず、前印象と後印象との間に多少の反對なかるべからず。蓋し新印象の獨立せんには素地なかるべからざればなり。夫れ激因の度を極めて徐々と加へんには、奈何に高度に上進するも依然として新しき感覺を起すなし。他状態の下に在ては歴然と感覺を起すべきに、毫も殊別の感覺を起すことなければ、激因の増加は決して覺認せらるゝことなし。斯

るが故に極めて徐ろに其度を増しなば敢て感覺をば生せしめずして、電流もて神経を破潰するを得。又極めて徐ろに温度を増減しなば、蛙をして毫も運動を起さしめずして煮熟或は凍死せしむることを得べし。寒暖の感覺は若干の速度を以て皮膚の温度に變化の生じたるどきにのみ起るものなり。夫れ温度の感覺の生ずるは、皮膚が十分零温度の上にか下にある温度を得たるときに生ずるものとなす。頗る微弱の激因は先行或は同時の激因に吸収せられて、殊特の感覺を生ずることなきものなり。人若し某時間強勢の電流に感じたりしなば、其後弱勢のもの來るも之に感ずることなし。又若し右手より強勢の電流來り、左手より弱勢のもの到らば、獨り強勢のもののみ感知せられて、弱勢のものは注意せらるゝとなし。若し「コムパス」の一端を取りて傷所に觸れ、他の一端を其周圍の邊に接して同壓力を加へなば、起るところは唯一個の感覺のみ。縦ひ傷所に二端を置かば二個の感覺歴々生ずべき程の距離の二倍に在りても、以上の場合にては二個の感覺

決して生ずることなし。ヒポクレエツは處を異にし時を同ふして二個の苦痛起らば、小なるものは大なるものに合併せらるべしといへることあり。非常に激興したる心狀には、強き印象すら大なる勢力を及ぼす能はず。さればにや獻身者の熱したる忘信は、肉體の苦に毫も意を止めざるなり。是と同理にて沈鬱者及び亂心者などは、克く苦感を防壓し得るものなり。是故に意識を拘束する固定觀念強烈なれば、他印象は注意を惹くこと能はざるものとす。斯るが故に、識域は常に同程度なるものにあらずして、先行或は同時の印象間に十分なる反對なき時には上昇するものなり。反之、某の場合には、習慣或は適合の結果として降下するものなり。若し消えゆく音響に耳傾くるならば、最初より聴かざりし人には聞くべからざる最低程度迄に識域をして下らしむるを得べし。又新に眺めなば決して發見すること能はざる程の遠距離にまで、鳥の飛び去るを目送することを得べし。新に強大の印象を會得するより弱勢のものを保持するこ

とは意識に對して容易なるものとす。誠域降下の一例は之を囚人に見るべし。數月間暗中に閉居したる囚人、一旦明處に出つれば些細の事物微少の差違に注意し易し。斯くの如く誠域を降下することは上昇せしむることと類似の方法に規定せらる。即ち印象を徐ろに増加するときには感覺を生ぜざる丈けは、徐ろに減少するも尙感覺を減殺することなし。

全く一様にして、間斷なき印象は意識に上ることなく、從ひて感覺に伴はるることなし。想ひ看よ、空氣の脈力が感知せらるるときは正に其脈力の變化したる時なるを。吾人が地球の迅速なる運動を知るなきも、其運動が間斷なければなり。又網膜の血管が網膜自身の上に陰影を投することあるも吾人之を知らざるは常に其陰影に慣れたればなり。然るに故らに陰影を強光の印象に馴れたる網膜に投すれば、注意を惹く。一物質ありて其味、唾液の味と相違すれば、始めて味の感を得すべし。夫の舌が唾液の鹽分に感ぜざるは、其鹽分に慣れたるが故なり。

一様なる印象

感覺の増加と
激因の増加と

フエヒネルは、各激因の結果の前在激因に規定せらるべき割合を表章すべき數學上の公式を工夫せんと努めたり。自己と他人との實驗より一の法則を演繹して曰く、激因の度を増加するより來る所の感覺の増加は其絶對的增加に従ふことなく、前激因に對する増加の關係に據るものなりと。若し感覺が若干度まで増加せられんには、激因は一層多く増加せられざるべからず。フエヒネル之を表式して、感覺が等級數にて増加せられんには、激因は等比級數にて増加せられざるべからずと言へり。之を例せば、若し感覺が一より二に進まざるべからざるならば、激因は十より百に進まざるべからず。又前者が二より三に至らんには、後者は百より千に達せざるべからざるなり。氏は此法則を以て唯中度の激因に對してのみ適用せらるゝものとなせり。視官の感性には一定の制限あるを以て、若し等しからざる二激因の勢力が何れも此制限を超越すれば、其差は傾解するを得ざるものなり。此法

則の下限は激因が甚だ勢弱なるとき、機關と神経系統の内部状態とが美事に一致して働くことによりて規定せらる。眼に關して所謂自然の光即ち外來の影響なく起る光は一種正則の幻影たり。他官能も亦全く主觀的感覚より逃るゝこと能はざるが如し。夫れ主觀的感覚なるものは、外來の激因甚だ微なるときにのみ有力のものとなるものにて、頗る微弱なる激因は網膜の抵抗を制服するに不適當なり。中度の激因に關してすら、此法則の普通なることは未だ明白ならざれども、視官觸官に於ける中度の激因に妥當なることは更にも言はず。聽官に於ても亦然るが如し。各官能に起る例外のものに對して、特殊の理由を明示し得べきや否やの疑問は今後十分なる解答を待つものなり。茲に數學的公式が善く適用せらるべきや否やは言はず。然れども凡て感覺の上進は相互の關係に由て規定せらるゝことは經驗の明示するところなり。各感覺の顯出は必ず競争の結果に外ならざるが故に、感覺系列の各員は交互全く獨立するものにあらざるなり。今本項の

意を約言すれば次の如し。絶對的に獨立せる感覺の連鎖てふものなく、各感覺は前時にか或は同時に直接に經驗したる感覺への關係に規定せらるゝものなり。

四、感覺の性質。 感覺の性質に關しても、亦同様の法則發見せらる。

刺戟同一なるも事情異なれば、温暖の感覺を起すことあり、寒冷の感覺を起すことあり。今若し手を室内の温度と同温度なる鉢中の水に入れば、必ず温氣を感ずべし。これ手より放散する熱が、狭隘の鉢中に於て防止せらるゝが故なり。又手と同温度なる水を第一瓶に盛り、第二瓶には少しく高温度なる水を満たし、第三瓶には第一瓶の水より少しく低温度の水を満たし而して右手を以て第二瓶に投入し、左手を以て第三瓶に投入したる後、更に兩手を同時に第一瓶中に投入するときには、爰に寒温を與へざりし其水が右手には冷かに、左手には温かに感知せらるべし。

今遅緩なる運動に繼つくと、急劇なる運動に繼つくと、ときには、同運動を以てするも、其感ずるところ、決して等しからず。前場合には奮力を感じ、後場合には休息を覺ゆ。然り、休息の感は變化即ち運動の感に反對することよりして起る。突然なる激因の停止は頗る活潑なる感覺を喚起すべし。見よ奏樂の最中に當り突然の中止は聽者の心を驚起すべく、磨屋は、磨車の停歇に驚覺すべし。同表面に對しても、先行の觸覺の性質に従ひて、粗滑を感すべし。又鹹苦の後には水の味や甘露の如くなるべし。

感覺の特殊の性質は一般に感覺の發生を規定する事情と類似する事情に従ふが如く見ゆるは、此對比の結果にして而して殊に視覺の領内に於て著明なり。唯一の色を見ることは、毫も色を見ざることを同一なるべし。夫れ色は對照して始めて其性質は克く傾解せらるべきものにて、深黒色も能く白色と比較してこそ、始めて深黒色として傾解せらるべきべし。而し

補色

て色の性質は其補色に伴はれたるときに殊に歴然たるものなり。二色の光線を合して灰白色或は白色の感覺を生ずるときには、其色を稱して補色といふ。補色とは次の如し。

- 赤色 と、 青みを帯びたる綠色。
- 橙黃色 と、 淺藍色。
- 黄色 と、 青色。
- 綠色 と、 紫藍色。
- 紫色 と、 黄みを帯びたる綠色。

若し補色ならざる色を相并置せば、一色は常に他色の補色に影響せらるゝものなり。反對は常に同時的たるを得るのみならず、又繼續的たるを得べし。即ち色は補色の側にて跳めたるときにのみ、歴然と顯はるゝにあらず。直ちに補色に繼續するときにも亦抱和せらる。是故に色の判然たる感覺は、同時的及び繼續的對比の連合よりして生ず。抑色がそのまことの性質にて目撃せらるべき基礎は如何。勿論正則

的即ち模型的陰影は眞正の色と認定せざるを得ず。然れども實際の性質を決定するには相對的ならざるべからず。詮するに感覺の性質も亦其存在と同じく他感覺への關係によりて規定せらるゝものなり。

五。感覺の相對律。

感覺の研究は、曩に第二章にて與へたる意識の説明をして益確實ならしむ。吾人は意識を解きて絕對的に獨立せる單一自立の感覺の連鎖となすこと能はず。他の感覺に關係せざる感覺は吾人之れを知らざればなり。即ち此法則を呼んで相對律と稱するなり。感覺發生して成立するに至る時よりして、感覺の存在及び固有性は他の感覺への關係に由りて規定せらる。

此相對律は間斷なき心狀は神經行程をして活動せしむること能はざるものなりといふ神經系生理の原則と一致す。此の如く有機體及び意識の先行的情狀は、繼續の情狀に基礎素地を形成するものとなす。區別即ち關係は同時的たるを得べく又は繼續的たるを得べし。然れ

相對律

小兒は繼續的
激因を區別す

ども繼續的關係は初級的のものにして、同時的的感覺は殊に觸覺、味覺及び嗅覺の傾内に於て混淆すべき傾向あり。然るに注意は肉眼と同じく寂靜ならずして彼より此に動搖するものなれば、錯雜なる激因は繼續的として傾解せらるゝものとなす。而して繼續的傾解は同時的のものより更に明亮なるものなり。重量の小差は兩手を以て同時に計るよりは、一手を以て繼續的に計るを以て明に認知せらるべく、又二瓶の水の温度を知らんにも、兩手を一時に投入するよりは、一手を順次に投入すれば克く測知するを得べし。嬰兒及び下等動物は繼續的激因を區別するよりは、同時的激因を辨別する力少なきものなり。これ相對律と神經系生理の原則との一致を證明するものにあらずや。如何となれば靜止の刺戟は、相互に繼續する刺戟の如く同一なる變化及び同一なる反對の如きものを起すことなければなり。繼續的反對は同時に與へられたる物の反對より一層強く奏効するものなり。既に觀察したるが如く絕對的と相對的との感覺、即ち感覺と感覺の相違とは

之を區別すること能はず。感覺の心理的及び生理的干渉は、フエヒ子の如き相對律の須要を示さんと努力しける人すらも、免角論議する處なり。氏曰く「吾人は決して種類或は勢力の異なる先行或は後繼の感覺を有せずして、某種類某勢力の感覺を有することなきが故に、先行或は後繼の感覺なき感覺を有することの可能を嚴正なる實驗もて證明すること難し。然れども余は斯る臆想を禁すべき經驗上の根據も、亦理論上の根據も發見すること能はず。斯るが故に始めより幼兒を一様に赫々たる光明の中に置き、他の一切の激因をば出來得る丈け移去せんも、小兒は尙光明の輝々たるを見るべしと想はるゝなり」と。氏は相對律の羈絆を逃れんとすれば、第一感覺即ち意識の發端に立戻ることを必要なりと認めたる者なれども、此例證は絶對的發端を示すものにあらざるなり。其は何故ぞと問はんに、光明の中に醒覺したる幼兒は、光の感覺を受納する前に、一般感覺及び運動感覺恐らくは他の感覺も既に有せしなるべく、從ひて其光の感覺は根據として此等不

定の感覺を具有し、後に生ずるあらゆる光の感覺とは不同の性質を以て見はるゝなるべし。想ふに其の光線の爲に内部より視官中に生ずる行程に準備せられたるものならむ。是を以て識域は既に業に横ぎられたり。加旂光の激因(縦ひその者全く一様なるも)は繼續せる二ツの時間に於てすら、正しく同一の結果を生ずるものにあらざるなり。其第一時に於ては漸次視覺本部に歩を譲るべき不明の傾解と刺戟とあらんのみ、而して此過渡の際に相對律は行はるゝなり。即ち各時に於ける有様は其が前時のものに規定せらるゝを以てなり。殆んど心狀が絶對唯一、即寧ろ單一に愈近接すれば、益識域に密接すとは蓋し信すべき言なり(第二章五項)。故にあらゆる差違及びあらゆる「リズム」は意識の存在する間は滅亡し得るものと想ふべからず。若し相對律が全く妥當なれば、感覺と思想との間に明白なる區劃を與ふること難し。前進の感覺が繼續的對照の結果にて、即ち繼續的相對にて、後進の感覺を規定する方法上に、基本的記憶の存在は歴然たり。

時間の差違其反對及び其對照等の影響は辨別力として基本的比較として感覺を指示するものなれば、思想本部として高等階段に顯はるものと同じき意識活動力の至單形態爰にも存するなり。あらゆる感覺は同一意識の各員として相抱合するを以て、感覺の相關即ち其興起と其性質とを規定する關係の存在すること終に明晰なり。我が赤の感覺と他人が青緑の感覺との間には對照をなすこと能はず。是故に、縦ひ意識を以て感覺の一聯鎖と、思料せんも、猶綜合なるものは、必須なる豫料たり。

六。運動感覺。縦ひ感覺は單に受納したるものと思惟すべきも、凡て感覺は外界より來りたるものゝみにあらざるとを觀察せざるべからず。何となれば第一に有機體は自ら一小宇宙にして、若干の獨立をなして大宇宙に對抗するものなればなり。有機體内部の活動力は、必須なる印象即ち一般感覺を與ふ。營養血液の循環、及び呼吸は若干度までは、外面に起るものより獨立して遂行せられ、強或は弱の感覺を

起す。第二に有機體は外界が激因を運搬し來るを待つものにあらずして、運動感覺となん呼はるゝ者に伴はれたる運動を遂行するものなり。或人の主張するが如く、外來の刺戟によりて感覺の發生する前にさへ神經中樞に於ける潛勢力の過量よりして運動の遂行あり。心理的論點より之を觀ば、此等運動は自然的にして且動機なきものにして、運動感覺を惹起すことを得。蓋し此感は明けゆく意識の夙時の一感覺なり。

變化即ち過渡は各有機發動が豫料するものにして、又之が爲に其發動は成立するものにして、其性や自動的并に他動的たるを得べし。刺戟の吾人を襲ふや音に外部よりするのみならず、又内部よりす。而して自動的變化は蓋し他動的變化に先行すべし。是意識作用は第一に自發的反射的及び本能的運動に表はるゝものなればなり。

心理的立脚點よりすれば、運動感覺は二大部に分たる。一は努力の感覺。二は筋肉の感覺是なり。努力の感覺とは其運動の遂行に用ひら

れたる努力の感覺をいふ。吾人は有意に或は無意に其運動に要せらるべき努力の度を整へ且つ之を測算す。而して又實際の運動の前に當りて其勢力を豫驗することを得。之と同じく實際運動を企つることなく、吾人は自己が微弱なること、疲勞せることを感じ得るものなり。筋肉の感覺とは一個或は二三の筋肉が一時保有せる情狀の感覺なり。是は高等神経中樞の配下ならぬ筋肉より來るもの、例へば疝痛、産氣及び脛肉の脛變の感覺の如し。然れども亦筋肉が腦よりの運動の衝動に由て、投入せられたる情狀よりも結果すべし。例へば筋肉の緊張或は疲勞の感の如し。

然るに是等二類の感覺は其生理的行程に關して、等しく判然と分たるゝや否やは未だ確定せず。或人主唱すらく腦を出立するの前腦の運動中樞に起る運動行程は、運動中樞より感納中樞に至る刺戟を神経纖維に由りて送るものなりと。あゝ此説明は腦中に發起したる刺戟に基ける感覺の類に與ふべきものゝ如し。是、神経力の感覺と稱せらる

いものなり。此見解はジヨン、ミュレルの唱導せしところにて、一に氏は吾人が正に遂行すべき努力の度を、重き物體を持上げ或は一步を移す前に即ち實際の運動の前に於て、感じ得るといふ辨論に據れり。而して他學者の運動の感覺即ち努力の感并に實際の筋感を説くや、其源を筋肉より腦に送る刺戟に基けて、筋肉收縮の始終の報知をなす者なりといへり。斯るが故に適用せらるべき力を感じ、或は之を計算するとは、經驗及び習慣の結果にて説明せらるべし。若し後者の見解にして正しかれば、而して又ザー氏が筋肉の内部より高等中樞に至る感納神経の發見に由りて益勵されたれば、吾人が努力の感覺にて經驗するところは、實際始まらんとする運動行程にあらずして、其結果なりとす。

七、**感覺と運動。**殆んど一切の特殊感覺の上に於て、須要なる職掌を營むものを有機體の運動となす。綿密なる試験によれば努力の感覺或は筋肉の感覺が、皮相の思慮の全く單一なりとする情狀の、諸元

素として發見せらるゝを見て知られん。凡そ物の味を知らんには舌の運動闕くべからず、又堅き食物は上顎を壓するが故に味を起す。嗅感の起るも亦空氣動きて鼻穴に侵入するあるを以てなり。故に空氣の進入を杜絶せば、奈何に烈しき香と雖も嗅感を誘起することなし。音を聽かんにも適當の位置に立ちて判然聞知し得るまでは身體を動かすべく、而して頭部の運動は少なくも免るべからず。殊に意を注ぎて聽音するときには、鼓膜部の筋肉収縮す。然れども運動の最須要なるは視觸の二感官にあり。眼は物體の距離に適合せざるべからず。而して斯く適合せんには、精美なる筋肉の收縮ありて、水晶體の表面更に凸面形とならざるべからず。此變化は多少の努力もて成就せらる。眼の位置によりて某筋肉は自動的に收縮し、某筋肉は他動的に弛緩するものなり。従ひて眼の位置は努力の感覺或は筋感に伴はれざるべし。光線の刺戟が中央小窩即ち黃點に落ち來るまでは、吾人は眼を動し或ひは額部をも動かす。身體の諸部に於ける觸官の精美なる

は其部分の可動性に一定の關係を保てり。エーバー氏に従へば、觸覺の最鋭なるところは、舌唇及び指頭に於て、その最鈍なる所を胸部及び背部となす。觸官の最要なるは身體の可動的部分にあり、自動的實驗の行はるゝは其部分に依りてなり。觸覺及び視覺は相協力しなば、吾人が外界への關係を定むるに有力の手段となる。

上述の如くなれば、吾人は外界の印象を一に受納するものにあらざるなり。意識の生るゝ前に當りて、自動の天性は自發的反射運動に顯著たり。また吾人は刺戟に向ひて自動的に振向くことあり。例へば嬰兒が頭或は眼を以て光を探求し追従するときの如し。無意探求及び適應は感覺の性質を規定することに與つかるものなり。初形なる此注意が最原的のものなることは、大脳の除去せられたる鳩が頭を以て光を追ふことあるを見て知られん。但し茲に注意は反射運動の色を具へたり。意識的注意の統合、約言せば有意の注意は記憶の力及び純ら一時の印象より離れて觀念を構成する力の多少の發達を豫料する

ものなれば、茲に論定する時代よりは一層高等の階段に發見せらるゝものとす。

注意の感覺は、密に努力の感覺或は筋肉の感覺に干渉せり。蓋し強弱の收縮か其機關の筋肉に起るを以てなり。

注意は唯拒絶的の感覺に過ぎずといふコンデラの學説は、直接なる主觀的觀察によりても矛盾すべし。若し一感覺が意識を占領して他のあらゆるものを驅逐することあらば、其感覺は吾人の活動力を茲に停止すべし。是故に拒絶的の感覺は注意を豫料するものにして、注意をもてる感覺にはあらざるなり。然らば奈何して感覺は拒絶的となるべきか。刺戟は諸點より同時に吾人に注入し得べき者なり。例へば眼は諸點より光線の刺戟を同時に受納するが如し。且つ諸官能は共に働作すなり。若し純然たる他動的ならんには官能知覺は毎時諸種の感覺の渾沌を給與すべし。然れども毎秒それ等無數の雜多なる感覺より一個の感覺撰出せられて中心となる。而して注意は反射的に本能

的に甲刺戟より乙刺戟に移動す。既に述べたるが如く繼續的は同時に比して容易に且つ夙時に傾解せらるゝものなり。是は官能知覺に於きて、大に運動の必要なこと、連繫するが如し。

甲刺戟を去りて乙に移るべき注意を規定する動機は、疲勞の感にか或は遲慢の情に搜めらる。是等の感覺は注意をして新刺戟殊に先行感覺の自然的補充たるべき者に對向せしむ。基本的撰擇は、かゝる過渡の上に起るなり。

乙、觀念の構成

一、感覺及び知覺。諸感覺の相關作用に於ても、亦無意的注意に於ても、意識の統一及び其活動力は全く基本的方法に於てのみ表章せられたり。諸現象の單一なるが故その心理的表出を發見すること困難なりき。然れども今や純然たる感覺の傾を經過したるを以て、新感覺が常に先行的及び同時的の感覺によるのみならず、又時間の距りたる感覺によりて變化決定せらるゝことに注意を與へんとす。是は

新感覺が舊時の感覺を復歸するによりて起さるゝことなり。是は諸感覺が自ら反復することを豫料す。間断なく新印象に引き續つきゆくべき意識例へばAよりBに、BよりCに、又CよりDに繼續するが如き意識は、曩に記載したるが如き初級を越えて進むものにあらず。抑意識は悉皆斯くの如く組織せられたるものにはあらず。意識を有する生物は各自生活の状態を具へ、常に存在を保持するのみならず、區域を狹隘にするものなり。是印象の聯鎖は無限のものにあらずして、若干のリズムをなして章はるゝものなればなり。夫れ反復なかりせば生活即ち意識作用は存することなかるべし。生活は物質の吸收同化と物質の消費非同化との輪廻にあり。是故に有機作用にはリズム的反復あり。即ち呼吸及び吸息血液の循環、睡眠及び醒覺は生命のリズムなり。是また自然の一通則なるが如し。最も基本的なる意識とは、唯單一なる感納的及び運動的感覚と共に苦樂の循環あるものなるべし。即ち感覺の連鎖がDに到れば再びAに

戻るが如き者なり。但感覺は正確に性質を同化する事なかるべければ再起のAは、Aもて顯はすべし。然はあれど、若し意識を以て類似の舊感覺を再現する力を具へざるものとせば、又若し斯る感覺が極小の形蹟すら残すことなく消滅することならんには、同感覺の反復は心理學上何等の意味をも有せざるべし。心理學上反復の要用なるは再生力を臆断して意識をして後の感覺及び經驗を舊きものと結合せしむることに在り。茲に更に綿密の説明を下し得ざる所の意識の根本性あり。即ちB感覺の占めたる間隙の後にA感覺が再起するときにはBに先行したる情狀を再生する傾向あること是なり。Aは曩に殘したる痕跡を利用するが故に、反復上大に利あり。茲に一切の有機作用に適用せらるべき實行律行はる。凡て作用は反復と實行とに由りて益、容易となるものにして、是は殊に神経系統の作用に干して然りとす。凡て感覺は反復にて多少著るしき印證を得、殊特の性質を以て他の感覺に對向す。斯くて再三反復せられて親密となり習慣となり

たる者と、未だ経験せられざる最新の者との間、換言せば已知のものゝと未知のものとの間に反對の生ずることゝなる。反復と記憶との影響は、往々別法にて發起せざるべき感覺を喚起することあり。合奏の素音は、それが單音のときに生じたる感覺の活潑なる追想あるときには、明晰に區別せらるべけれども、單音の感覺と合奏の感覺との間に多少の時間の経過あれば、最早二者は區別せらるゝこと能はず。直接繼續にて聞きたる時にのみ區別すべき親密の關係ある二音は、三十秒乃至一分間を距つれば同一音として意識に覺えらる。二個の重量感覺間に十五秒乃至三十秒を距つるなくんば、十四オンス二分の一と十五オンスとの差は區別せらるべしと雖も四十秒を経なば最早區別すべからず。若し例を更に錯雜なる意識の現象にとらんと欲せば、初めて書を読み音樂を聴くときと、二度目に斯くするときとの差を想見すべし。凡て二度目には初度目より一段明確なるべし。斯る場合に於ては過去の感覺或は經驗の再現は、現實的の明確なる回

想に至らず。何を以て之を言ふか。曰く再生の情狀は直ちに一定の感覺と混淆し、敢て獨立自由の觀念として立つことなければなり。爰に無意的分類即ち同類の舊感覺に新感覺を引證すること行はる。然れば小兒及び視覺を回復したる盲者が色を見ることを學ばざるべからざることゝは、眞に彼等が類似の舊感覺に色の一定感覺を關係引證すること、即ち色を認識することをいふなり。最初の色の感覺は階式様の類似の感覺に關係比較せしめらる。見よ、生來盲なる人に深紅色を口述したるとき、盲者叫んで、それは喇叭の聲の如きものなるべしと言へりしとかや。

知覺は斯る無意の直接認識にあり。茲に起るところの心理學的行程は、觀念と現實の感覺との混淆なり。從ひて知念(Percept)は、觀念と感覺とより組み合はせられたるものと言ふを得む。然れども其觀念は獨立自由の因子として意識に上り來らざるが故に、羈絆的(gebundene)觀念と稱すべし。而して繼續的的感覺中の直接相關作用を基本的記憶呼び

たるが如く、知念を規定する記憶をば羈絆的なりと呼ぶべきなり。是記憶せられたるものが、之を喚起したる感覚と離るゝことなければなり。夫れ知念は新感覚が舊感覚に類似することによりてのみ成立するに至るものなれば、茲に表はれたる活動力を無意識の比較といふを得む。而して類似せるの故にて連合したる諸元素は、明確獨立のものとなりて見はるゝことなれば、是又羈絆的比較ともいふべし。反復を重ねれば重ぬる程、認識は容易に迅速に且つ無意識的に行はる。反復と實行とに由りて辨別時間一名認識時間并に意志時間は減少するものなり。

健全なる時にか或は不健康の時に起る諸の経験に、感覚と知覚との反對は明亮に見はる。睡眠より覺めたる際に、吾人は往々認識すべからざる感覚を有することあり、此時には無数の元素意識に顯はれて直ちに分類せられざるものなり。而して吾人が知覚本部に達し同時に周圍のことを明知するに到るは全く覺めたる時にあり。夢幻を醒覺の

意識より區別するものは、概ね同一官能印象が様々に傾解説明せられ種々に分類せらるゝ點なり(第三章八項を参照せよ)。強き興味を奮起せしむる激因に由りて覺起せられたる時、即ち激因の精神的關係が吾人を驚覺したる時、有するところの知念は、夢と覺醒との境界に存す。嘗て神經病にて視覺上の物體を覺知する力を失ひたる人あり、妻を見て妻たるを知らず、兒を見て兒たるを認めず、鏡に向ひて自己の影たるを認知せざりきと云ふ。又或る疾病のため言語文字を理解(知覺する力を失ひたる人、其視聽の二力をば損害せざりしことありしといふ。是言語より概念に至る路通は閉塞せられたるも、概念より語に至る道は無難なりしなり。クスマールは此病を呼んで語盲(word-blindness)或は語聾(word-deafness)と言へり。爾來腦生理の攷究は、感覚及び知覺が不問の神經中樞に附着せりとのことを示すに至れり。感覚は大脳の除去せられたる動物にすら起るべきが如しと雖、知覺は大脳の害せられざりしときにのみ起るべし。後腦の兩葉を烈しく痛つけたる後には、

犬は見るもの聞くものを理解することなく、鞭を以て威嚇せらるるも注意することなく、餌を見るも不注意なり、呼ばるるも應ずることなし。ムシクの言ひし如く、此情狀に於ける犬は心盲兼心聾なり。更に言はる観念と感覺とを連合する力を失ひたるなり。然れば感覺は被害なしと雖、殆んど知覺を失ひたるなり。再び幼稚となりたるものなれば、更に新に見聞することを習はざるべからず。

茲に感覺なる語は英國の學者が與へたる定義にて用ひたり。シツヘルンは縦ひ自ら明言せざししも、同様に感覺と知覺とを區別したるが如し。他の學者は知覺を解して爰に記載したる所より、更に錯雜にして一段濶大なる行程となせり。ヘルムホルツは感覺を解して、單に身體殊に神経系統の情狀として意識に上る丈の吾人官能の印象なりとし、知念をば同印象なれども、それより外物の觀念を構成し得る丈の者なりとせり。之に應ふるに第一に吾人の直接感覺は、初より身體或は神経系統の情狀として見はれざるとを觀察せざるべからず。吾

カリー氏の定義
カリー氏は、
感覺の部位
を定め、又一定
の物体に感覺
の關係をせしむ
る行程を知覺
と云ふ

人身體の智識は唯漸次に感覺の手段によりて得らるのみ。然れば上來用ひたる言葉の外には、感覺が先行類似の感覺と關係するに至る至單なる心理學的作用を表白する言語あらざるなり。抑、此發動は感覺の外因の意識を含むものならず。是は主觀的感覚及び感情の上にも、亦外來の印象に基因する感覺及び感情の上にも起るべし。

三、自由觀念。反復せられ又認識せらるるものは、皆に一個の感覺に限らず、感覺の全系列も亦然るものとす。然れば錯雜知念なるものあるなり。實際種々なる感覺は同時に起るものなれば、殆んど全く吾人が官能知念は錯雜なるものなり。錯雜知念に於て其内容は一部分時間の形態にて、一部分時間并に空間の形態にて排列せらる。時間及び空間の概念を綿密に試察することは之を次節に譲りて、茲には記憶及び觀念が奈何様にして綱絛の情狀より自由の情狀に至るかを究問すべし。吾人若し全く單一なる知念を有するのみならば、斯る過渡は行はれざるべし。△なる感覺が反復せられて、○なる觀念と混淆せ

自由なる觀念

ば、其行程は之にて終らむ。然れども(A+B+C+D)なる感覺の系列が屢
 再起しAが其後自ら見はるゝときは、b、及びcなる觀念并にaなる
 觀念の再生する傾向あり。其時は唯aのみ全くAと混淆すべく、而し
 てb、及びcは壓抑せられざる限りは、Aなる感覺と相違したるもの
 となりて顯はれざるべからず。故に其際意識内容の獨立部分となり
 て現はるべし。斯くの如くしてb、c、dが自由觀念とはなるなり。
 今假りに梨子を以て錯雜知念の對象と假定せよ。抑、梨子を知覺する
 ことゝは、同時にか或は直接繼續にて、色(A)嗅(B)味(C)堅度(D)等の感覺を
 有し之を一定の連合にて承認することの義なり。若し其色の感覺が
 再起するあらば、A(即ち色の感覺が自ら羈絆的觀念aによりて認識せ
 らるゝのみならず、又他の性質の觀念b、c、dを起す。今蔽帯たる葉間
 に一點の赤色を看ば、それが林檎たるを疑はず。は無意的に(A+B)の知
 念を、林檎の他性質の概念もて補ひたるが故なり。火(A)にて手を燒(B)
 きたる小兒は、後日火(A+B)を見たるとき敢て苦の現在なきも、苦の感

念(b)を有せり。

此の如くして起る所の自由觀念愈多なれば、意識中に獨立の觀念界
 即ち記憶世界形成せらるゝこと益々大なり。此記憶世界は若干の獨立
 を以て一時の感覺及び知念に對す。此時に當り直接感覺は純然たる
 副位的職掌を務め唯解放力として働くべきのみ。吾人が書を讀むと
 きに、其紙と黒き文字とは殆んど意識に現はるゝなしと雖も、其れ等の
 ものが運動せしむる觀念及び感情の中に消滅す。茲に於てか意識は、
 依りて以て若干度まで一時の影響より獨立し得る内容を得たり。

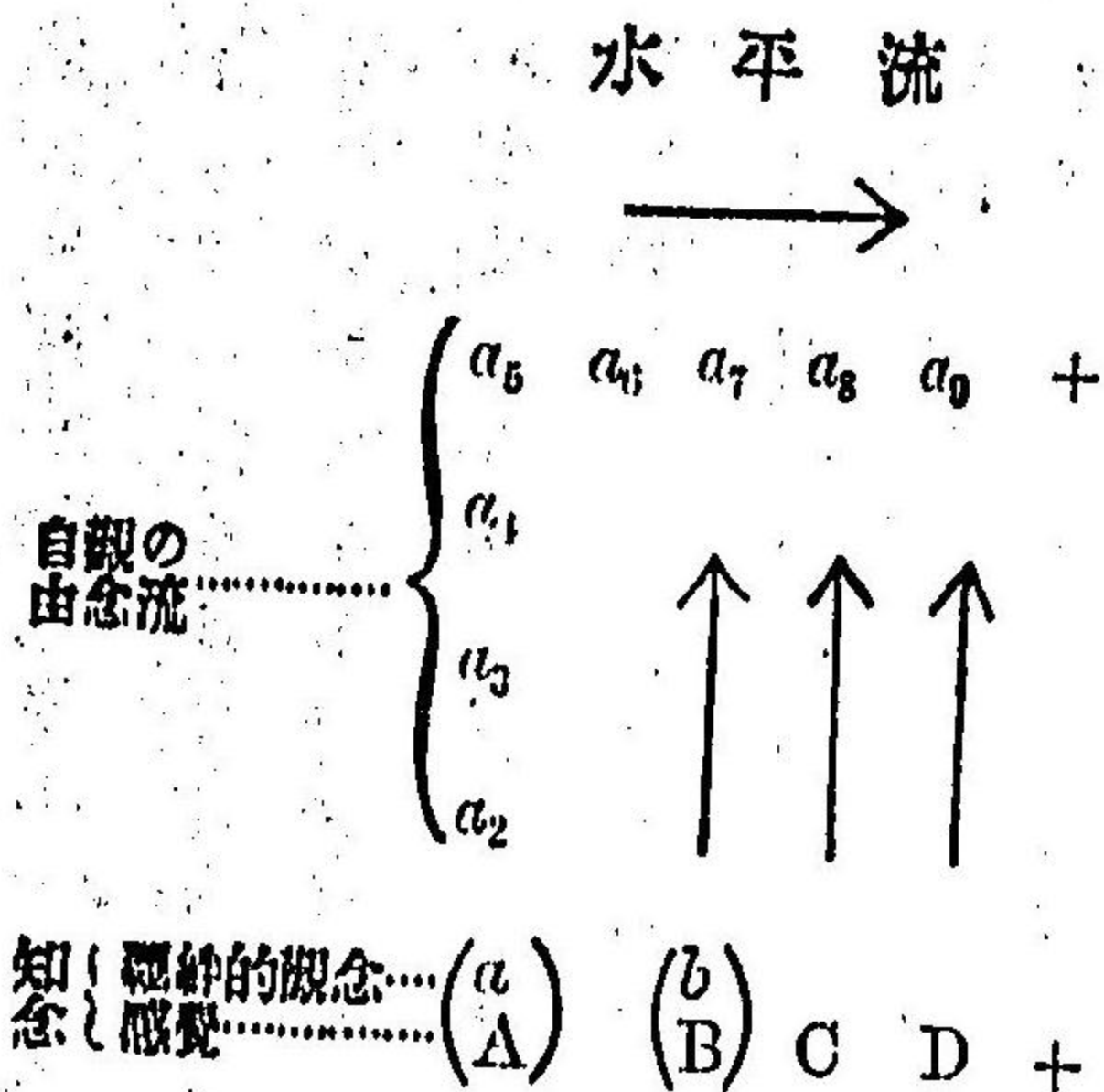
意識中に二流あり

勿論吾人は自身を外界より離して全然孤立すること難し。重に自由
 觀念が心を占領したるときすら、尙感覺は打絶えず起るものなり。吾
 人は又睡眠間に於てすら、官能印衆を受納するにあらずや。而して各
 感覺は羈絆觀念并に自由觀念を起すべき傾向あり。故に意識には常
 に二流ありて、一流盛なれば他流は衰ひ交るゝ盛衰す。一流は其折
 々に現はれたる感覺と、それが興起せしむる觀念とによりて決定せら

れ、他流は感覺に誘起せられて、永く繼續すべき自由觀念の鎖連より成る。前者は上向流と名づくべく、後者は水平流と稱すべし。而して其關係は次の如し。

茲にA感覺は自由觀念の聯鎖を運動せしむ。而して此自由觀念は常に一秒間(a₁……)消滅せざるのみか數秒間(a₂……)保存するほど

上向流



の注意を惹けり。且つ繼續的感覺BC D等は各自當に惹き起すべき觀念もて、a觀念の系列を切斷するを得ざるほどの注意を引けり。従ひて是等は總て認識せらるゝことなかるべし。此圖形に於てC及びDは意識の周圍にありて攪亂するも、Bのみ獨り認識せられたり。今假りに汽船に乗りて海岸を航するものとせよ。遙に樹木を見、足下に波浪の

跳るを聞かむ、又風聲人語等を耳にすべし。其他五官に觸るゝもの様々あるべし。最初の樹木の眺望は自由觀念の連鎖を運動せしむることならむ。而して吾人は其連鎖中殊に興味あることを考へ漸次類似せる觀念に移り行くことなるべし。斯く、a₂觀念より、a₁觀念に至る間にも、波は依然として跳動すべく、風も亦吹き、人も談話すべけれど、是等BCDは水平流を破るほどの感覺及び知念を起すなし。

音樂に傾聴しあらゆる觀念を驅除せんとするときの如く、吾人は直接感覺に全心を委ぬる場合あり。此時には毎秒吾人の心は音の新感覺に全く占領せらるべし、即ち水平流は毫も起ることなし。嚴かなる音樂家は奏樂中に當り聽者の評語を發することを好まず。是直接感覺の効果を弱むべき觀念の發起を避けんがためなり。又精神上的の娛樂を目的として散歩するときには、一心を片々たる變化的印象光線、雲、樹木、人間等に委ね、新印象の入來までは印象をして上進流を起さしむるなり。夢の心像の轉廻も之と同様なり。斯る際の圖形は次の如

くなるべし。

c_2 (C)

b_2 (B)

a_2 (A)

a_2 は B に、 b_2 は C に妨げられたるが故に a_2, b_2, c_2 の間には何等の連絡なし。

三、感覺、知覺、及び自由觀念。

自由觀念の進行と現實的知念の連鎖との間及び知覺上の二元素感覺及び羈絆觀念間に反比例存せり、是等は交互衝突し且つ抑壓せんと努むるものにして、一元素勢力を需むること愈なれば他元素のために残るところの勢力益減す、二元素及び二流は各心狀に現はるれど、強弱の度等しからず、何れも共に強からんには、リズム的轉廻起らむ、斯るが故に今感覺上位にあれば次に觀念上位にあり、是等は注意を得んとして競争するものにして、其間に平衡の起るには、双方豫め均等の明晰にて心中に現はれざるべからず、但意識は網膜上の最明點の如く常に或る一方に集合せるものなれば、斯る現出は到底不可能なり、看よ、心は時に或は殆ん

スペンサーが認識の脱

ど全く感覺及び知念に支配せられ、時に或は反省及び黙想の中に埋没せらるゝことあるにあらずや、然るに知覺上の二元素の差違は事實上見はるゝことにして、頭を倒にして山水の景を眺むる時には、山水の色一段新鮮なるを覺ゆるにあらずや、スペンサーが「認識の發動は慣れざることのために容易に妨げらるゝものなり、此時意識は感覺を説明するに至らずしてあらん限りの明亮にて感覺を取らんことに全く忙はしきものなればなり」と言ひしは蓋し疑ふべからざるの言なり、二流の關係及び二元素知覺上の關係は、同人に在りても時に由りて同じからず、亦人に由りて同じからず、或人の傾向は全く感覺の運動(音樂上及び藝術上の性質)に一心を委ね、又或人には感覺は認識彙類する丈けの價值あるに過ぎず(觀察家博物學者)、然るに或人は専ら自由觀念或は記憶或は空想或は抽象的思想の中に動作するあり、錯然たる知覺の性は、官能知覺及び思想の關係を決定するに須要なるものなり、夫れ知覺は不隨意比較として記すべき行程の上に在るが

故に自ら思想の活動力として表現す。是がため吾人は感ぜにて得たるものを頗有し之を意識の内容に合躰せしむ。思想の活動力が官能知覺に表章するものならば官能知覺及び思想は全然相違せる意識の二活動力たるを得ず、而して全く他動的なる官能知覺といふべきものなし。意識に收容せられたるものは直ちに意識の法則に従ひて組織せらるゝものなればなり。

カントは初めて再現即ち記憶が官能知覺に必須なることを明確に説明したり。氏の説に従へば官能知覺及び理解即ち吾人知識の二極點は、感ぜにて得たる種々の材料が由りて以て領解せらるゝ活動力に結合せるものなり。古の心理學者例へばプレトリーの如きは、知覺及び思想を以て全く相違せる二作用とはなせり。又ライブニッツの如きは知識を以て不明の思想となしコンデラックの如きは思想を以て變形の知覺とはせり。

四。自由觀念が知念より分離すること。奈何様にして自

由なる觀念は現實なる知念より分離せるものとして心に認識せらるゝに至るべきぞ。吾人は意識に此區別の元來の知識ありとなすこと能はず。然り、通例は記憶心像と知念との間に強弱の不同あり、されども此差違は頗る少許なるべく、又全く消ゆることあるべし。何れの場合に於けるも現在の印象が舊記憶の心像を喚起したる當時には、強弱の不同は何を意味するか知るべからず。記憶心像は現實の印象より注意を惹くこと少許なるべけれど、其起りたる際には敢て此心像を等しく實際のものとして眺むるに何等の妨害なかるべし。意識の内容を不同の二界即ち一は可能及び想像の世界に、一は實際及び知覺の世界に排置すべき根據の現はれざるは、夢の意識に於けるも亦雅き意識に於けるも同じ。然るにその反對は、概ね經驗が苦痛を與へたる時のみ發見せらる。

コンデラックの言ひし如き拒絶的感ぜよりして出立せむ。感ぜの傍にて効果を及ぼすべき意識の新元素は、其感ぜと混淆する傾向を有せ

り、是また次の結果を呈すべし。感覺或は知念は自己の強き光明を以て、更に強からざる元素即ち其れが覺起したる記憶心像を照すことに至らむ。記憶心像を喚起する實際の印象に連合して、其心像は印象程明晰ならざる時にすら、實在の印證 (stamp of reality) を受納することを得む。與へられたる者は此方法にて無意的に補充また擴張せられ、明かに矛盾せる經驗のなき限りは然るものなり。斯る補充なくんば吾人は葉間に林檎を見ること能はざるべし。うは何故ぞといふに、其視覺は林檎の全性質を吾人に與ふるものにあらずして、唯其一特質を給與したるに過ぎざればなり。此種の知念に於ては再現的元素の數遙に現在の元素を超越せり。然れども再現的元素は現在の元素よりして實在の印證を得るなり。

現在の印象が演出する此力は其本源を何れに發するぞといふに、それは感覺の強弱にのみ基因するにあらずして、あらゆる感納的及び運動的の機關の自動的幫助に基因せり。運動の最原的衝動は斯る場合には

本能の起す運動の衝動

重に一定感覺の暗示したる方向に向ふものとす。故に其れ等感覺は自己所有の強弱と効力とに適當なるものを超越したる結果を得るなり。而して抑制せられざる以上は毫も懸念を起すなし。凡て動物はおのが餌香を追ふものなれども、唯係蹄ワザに捕はれたる時にも、同一感覺は常に同一事情に導くものにあらざることを觀念す。本能は屢誰かすべき運動の衝動を有することあり。例へば蜜蜂及び黄蜂が毛氈の模様なる花に向ひて飛行することあり。蟲類が其嗅の爲に誰かされ、枯草に自己の卵子を横へることあり。大概の動物は奈何なる種類の卵子を問はず、おのが巢中にあれば孵化するものなり。又幼少のものなれば他動物をも養育するものなり。看よ、牝雞は鼯鼠、或は鶯の卵を孵化すること屢なるにあらずや。猫が鼠の兒を養ひしことあるは、屢耳にする所なり。又幼兒は握りたるものは何なるを問はず、之を口にし之を吸ひ間々苦感を覺ゆることあるにあらずや。此くの如くして、小兒はおのが單一哲理にて夢みたるよりは、遙に多く事

物及び關係の存在を學ぶ。

茲に起りたるものは直接感覺といはんより、無意識判斷といはんこそ更に理あるべけれ。論理的に式表せば、稚き意識の推論する所は第二格に於ける積極的斷案なり。斯る推論もて幼兒は實驗すなり。AはCなり、Bも亦Cなり、故にAはBなりとは、幼兒の屢結論するところならずや。嘗て一小兒あり、雪も白く、砂糖も白ければ、雪は砂糖なりとの直接斷言をなせしことありき。是白色の視覺が甘味の類似を喚起したるものにして、白色と甘味との連合が第一に心に卓絶したるなり。然るに哀なる哉、經驗は此結論を破りて、甘味の觀念に特殊の印證を與へ心の一隅に追ひ込みたり。要するに第一基礎は可能と實際との反對より作られたるなり。斯くて自由觀念は感覺及び知念と一定の反對關係を保ち、最初の信任は破滅せらる。同様の事實が實際印象の存する間に當りて、直ちに現はるゝ情狀にも影響を與ふ。此印象の喚起したる觀念は最早其印象と混淆せず、多少

の疑念多少の不安心のために其心狀は最初の如くには密結せず。幼兒が満足は常に飢渴に伴ふものにあらざることを學びたらんには、その心中には現在の不快の感情と、必要する満足の觀念との反對起るものなり。曩には二心狀混和して一心狀より他心狀に至る過渡は連續的なりき。然るに今は現在の知念と連合したる觀念とに多少の振動あり。

記憶を以て意識元素を再現認識する力のみにあらずとし、再現したる元素が過去にて經驗せられたることを識る力となさば、是正に期望及び希望より後に發達したるものならざるべからず。初め吾人は觀念を目して、現在に於きても亦未來に於きても實行し得べきものとなす。而もその内容を全く過去せるものと認識するは、經驗に限られたる時にあるのみ。自由觀念は實在の標證を失ひたる時、屢其れと共に消ゆることあり。或る精神發達は、決して再び知念たるを得ざる觀念を保存することあり。

此過程上觀念に反應する知念が、通例現在の知念の前に加或は後に經驗せられたりしことの緊要なるは言を待たず。實に各心狀は二極を具へ、一極にて前なる心狀と連繫し、他極にて意識の後素と關係す。例へばBはaに由りてAと連り、aに由りてCと結ばるゝが如し。今若しCがBを再現せば、Bは連鎖上Cの前に位置を占むるならむ。蓋し此場合には、^oてふ極が第一に意識に現はるればなり。然るに之に反てしAがBを再現せば、BはAの位置を占むるべし。是^oてふ極が第一に發現すればなり。飢たる小兒は腕(A)にて取り上げられれば泣き止むべし。何となれば腕は満足(B)に至る第一階なるを以てなり、而してCは連鎖上Aの後に坐位を占むるに至る。

ロバート・チンメルマンが暗示したる此學理は、縦ひ副位的、補充的關係に於てのみなりとも、要用なるものなり。希望と記憶とが隔離する第一原由は、知念と觀念との一定反對が生ずる原因と同じく、經驗及び失策これなり。吾人の天性は固^oと實行的なれば、前進的再現は最も自然

前進的なる再現は自然的なり

的のものなり。さればBはCなる觀念を惹起すべき傾向を具ふるものなり。Aなる觀念を起すべき傾向を有すること少なし。膳の排列を見れば、飢えたる人は食物の觀念を起すべけれども、食物を見て膳の排置を念ふこと通例稀なり。意識の最劣等の階段に於て退歩的再現は起ることなし。夫れ生活なるものは常に進歩せんと努むるものなれば、唯衝突の經驗に出會する時にのみ退歩するものとす。斯るが故に、Cなる知念が其先行者Bの觀念を起す場合に當り、屢Bが先行者として現はるゝことなく繼續者として現はるゝことあり。かくして期望は起るべきなり。唯經驗が制限的影響を與へたる時にのみ、^o及び^o間の區別は意味あるものとなり、運動の衝動と信任とのためには看過せらるべし。

實行的傾向より離れてすら、前進的再現は最も自然的なり。心理學上より之を見れば、AよりBに、或はBよりAに到ることは決して關係なきことにあらず。其二過渡を全く相違したるものとするか、或は時に

全然反對せるものとなす。明より暗に變ずるは、暗より明に變ずることと全く反對にして、樂より苦に至ること、苦より樂に變ずることは著明なる例なり。左程その反對は強からざるも、種々の排列が種々の感覺を生ずることあるは、尙此場合なり。食事の時肴料の配置は決して無關係の事にあらず。凡て逆まに再現する時には、通常經驗したる所より相異せるものを生ずること必然なり。されば添加物の順序は心理學に大に關係ありといふべし。退歩的再現は進歩的の如く心中深く植え付けられたるものにあらずして、一段の發達を豫料するものなり。此説明によりて吾人は見る、智識的元素を他元素より引き離して論歩を進むることの頗る困難なるを。今は此發達の進路に於ける感情及び意志の影響をば之を措き、其れに關する疑問は後章論明すべし。

上載の數例は最原的初級より探りたるものなれど、經驗が過信し且つ豫料せる意見及び希望に、矯正的影響を興ふる場合に於て、必ず同行程の反復せらるゝを容易に認むべし。是は理論的及び實用的の各事業が當に受くべき試験なり。科學的實驗の方法は茲に記載したる心理學的行程より生長したるものにして、各實驗は某の一應記の結果を取りて、又其説を吟味するにあり。

未だ以て意識を明白ならしむるに足らず。曩に基本的、羈絆的、及び自由なる記憶を區別し、又自由なる記憶が知覺及び期望より分離する有様を示さんと試みたり。然れども初め觀念が發源したる一定の意識は自由なる記憶と連合して離れざるべし。時間の觀念及び其發達は次節にて論ずべければ、茲には一定の時間に對する觀念の關係は記憶及び自由想像とを劃別することに重要な點なることを記すべし。即ち想像は觀念の内容及び連合を變換し新排列及び新群團を創造するものなれども、記憶本部は段々として現實の知念の順序を追ふものなり。構造的想像に反對たる記憶上、認識即ち知覺は自由觀念に力あるものなり。吾人は感覺を認知すべきが如く自由觀念を知覺すべし。而し

て觀念の認識とは、吾人が觀念その者或は觀念の反應する感覺を既に有したりとの義なり。

五、意識の形式的及び實際的統一。記憶は諸元素を統一するものにして、意識性質の模型的に表はれたる者なり。記憶の發動は現在なるも、記憶する事柄は過去に屬せり。自我て、お觀念の發芽は、實に感覺及び觀念を抱容結合する統一の上にある。故に此概念も亦心理的概念が有せる丈の深き基本を具へたり。是この概念は意識作用の實際の根本形態を表章するものなればなり。此概念につき發見せられたる困難は概ね次の事實に基く。自我を以て全く單一なるものと視做し、一定の某心狀即ち一定の某感覺或は其觀念となすべければなり。

若し自我本部は單一元素として見はれ意識の他元素に對比すべきものなりとの臆説を以て出立すれば、其探求が徒勞に了るべきこと敢て驚くに足らず。夫のヒュームは自我の觀念が經驗に背反すとのこと

を證明せんとして言へるあり、若し奈何なる印象と雖自我の觀念を起すべきものは必ず恒に吾人生活のあらん限りは同一にして不變化(常住的)ならざるべからず。蓋し自我は斯る方法に従ひて存在すと想はれたればなり。然れども恒に不變的の印象なるものなし。苦痛及び快樂、悲哀及び歡喜、情欲及び感覺は、凡て相連續して同一時に存在するものにあらず。自我の觀念は、其れ等印象の中よりも或は他の印象よりも派生すること能はざるものなれば斯る觀念はなきものなり。今予が自我と呼ぶものの中に深入する時に、予は常に寒、温、明、暗、愛、憎、或は苦樂の知覺に墮つく。余は知覺なうして奈何なる時に於ても自我を捕捉することなく、又決して知意の外に奈何なる物をも觀すと。此言誤りなしと雖も、探求の場所當を得ざりしなり。抑自我の性は感覺、觀念及び感情の連合及び其連合の形態、法則の上に表はる。ヒュームは樹木を見て森を見ざるものといふべし。氏は全く意識元素間の内部統一を看過せり、内部統一は種々の元素を同一意觀の元素とするもの

なり。されども氏は何物ありて意識元素を集めて一把となすやを問はざるべからざるに到れり。此目的には連合的勢力なるべからず。然るにヒュームは把なる各員を見て之を見失ひたり。即ち氏は各個の知念に獨立の存在を與ふるに至りしが故に、一個の不可解的問題を有せり。個々獨立に存在する知覚は如何にして連合するに至るべきかの理是なり。氏は終りに「此困難は予の理解力を跨越せるものなり」と自状せざるべからずといへり。是當然のことなるべし。若し夫れ意識の各元素が初め全く獨立のものとして再生せられたらんには、之を集合統一することは到底不可能なり。

氏の發揮したる此臆説即ち自我は意識の一元素として見はれざるべからずとの説は、言語上已に矛盾を免かれじ。若し自我及び意識の一元素(感覺、觀念或は感情)が全く同廣表たらんには、常住の元素(自我)と混和し得ざる場合には、自我以外に落つることゝなるべし。然れば奈何して吾人は其れ等元素を有すべきか、識内に在る各事物は自我に關係

せざるべからざるものなればなり。又常住的感情にか或は有力なる觀念にて消耗せらるゝものならざればなり。抑自我は微弱なる感情にも、亦有力なる感情にも現はるべきものなり。意識の周邊なる觀念にも、意識の中心なる觀念にも現はれざるべからず。強弱の感情間にも、又中心及び周圍の觀念間に、相關作用を起さしむるものは實に此自我なり。意識統一の表出したる自我なりとす。吾人は實際の自我と偶然的暫時的の思想及び感情とを區別するも、心理學的に之を思考せば自我は兩者を抱合す。

自我の觀念は直接知覺より派生することなきも、意識作用の一般の性質及び状態より推論せられざるべからず。是は自我が意識のあらゆる限りは常住不斷なる活動力、更に言はゞ、凡て意識が豫想する綜合的活動に基くものなることの必然の結果なり。各心狀に見はるゝものは此活動の産出物にして、活動その者にあらず。是吾人が明かに自己を識る能はざる所以なり。何となれば吾人が自身につき考ふる所の其

心状は綜合に規定せらるればなり。即ち自識は各種の意識と同じく綜合の手段によりてのみ生ずるものなればなり。深く吾人が意識中に進入するも、綜合即ち内部統一は常に隠在す。故に綜合は不斷的豫想たり。

綜合は絶對的のものにあらずして、常に相對的競争的なることを許容せざるべからず。是は意觀作用の發端に當りて明亮なることなり。此時全く散亂孤立せる感覺及び衝動は内部統合なくして入り來るが如し。故に或る學者は意識作用の統一は其發端より存するものにあらずといへり。此人の觀念は精神作用が散亂せる獨立感覺即ち徐ろに集合して相關的連合をなす所の感覺と、同時に發端すといふにあり。故に斯る學者は幼兒に種々なる自我ありとなす。種々なる自我とは、大脳の自我、延髓の自我及び各中樞感納機關に對する自我等にして、後遂に燼滅すとせられたるものなり。然れども諸自我の合併とは心理學上意味あるものとは思はれず。斯る見解は物理學的或は生理學的

の比論に基きたるなり。土砂の二杯は合して一杯の土となすべく、二個の有機細胞は一新細胞となるべし。然れど二自我即ち二意識が連合して、一自我となるは心理學上の背理なり。意識の綜合は單に各部分が連合したるより生ずるものにあらず。是物質的連合と精神的連合とを區別すべきものにして斯るが故に意識の本源は大問題たるなり。然りと雖もヒュームが意識の常住的要素を以て、自我なる觀念の基底となしたるは誤りにあらず。何となれば記憶及び綜合に表出するもの即ち意識の内部連合に表はれたる統一は、純然たる形式的なればなり。是は一切の意識の條件なれども各意識はこの他に實際的統一を具す。意識の形式はあらゆる有識生物に共通す。夫れ個物の性は、綜合が致す所の勢力の度の外に、形式的統一に抱容せられたる一定の内容に在り。而して、此内容は各時變化するを得ざるものなり。人が自己を其中に認識する有力なる感情及び觀念の群なかるべからず。其觀念及び感情は全く生活中絶えず連續するを要せざれども間斷なく

循環せざるべからず。此關係に於て感情及び意志は明かに感覺及び觀念より優に緊要のものとなす。生活感情一般感覺に伴ふところの苦樂の感情は氣分と共に素地を形成するものなり。是は看過せらるること歴なれど吾人が實際の自識上觀念或は思想などより更に必要なる職掌あるものなり。氣分は縦ひ概ね漠然たるべきも精神上の内容に標證と彩色とを與ふ。眞の人品は感情及意志の作用の統一なくんば發達するものにあらず。有力なる感情を具へずして不斷新奇のものを探求して是より彼へ飛び廻はる人は自己を統一するに十分な時間と勢力とを有せず。自己を知ることには自己を認識することにして是には意識元素の絶えず循環することなかるべからず。而して實際的統合の崩潰は終に形式的統合の崩潰を來すものなり。精神病の行程は當に之を證明すべし。

六。觀念の不滅。既に觀察したるか如く心理學上より之を見れば感覺は無より發生するものなり。故に感覺は意識作用が綜綴せ

意識の實際的統一を人

らるゝ元素なれども其説明は之を意識中に發見すること難し。最も單純なる觀念は再現的的感覺なり。然れども吾人は觀念と連續的的感覺とを區別するものなれば又基本的感覺が復起せしめたる觀念とを分別するものなれば抑觀念は何所より來たる乎の疑なき能はず。觀念は心理學的無より現はるゝや將た識國以下より存在する乎。無意識意識の關係の問題と連繫して此疑問に臆說的に應へたるものは第三章既に記したる所なり。吾人は一旦有したる觀念を未だ有せざる觀念に比せばそが意識に一層親密の關係あるを知れり。觀念の保存縦ひ常に意識にあらざるも并に意識の毫も與からざる觀念の勞作は心界に勢力不滅則を應用するの困難あるにも係らず無意識的精神活動ありとの觀念に正面的價格を與ふるを許すべき者なり。感覺及び觀念が意識より消えたる后痕跡の殘るものとせば内界にも外界に於ける勢力不滅に類似せるものなかるべからずとの臆斷を立つるを得べし。然れども内界外界の差違なくんばあらず。外界に於ては潛勢力

を平衡の一定情状として説明し得べきも、内界に於ては之に相應したるものありし(第二章二項及び八項を参照せよ)。生理的に之を見なば、何等の困難もなきことなり。何を以て之をいふか。蓋し大脳行程は、曩に起りたるものと同種のものとして起るべく、又反復實行せらるゝこと屢なれば益易く起るべしと解するは、甚だ容易のことなればなり。或る心理學者(殊にヘルバルト學派)は正直に觀念を把住することは、以て正則的となすべきも、之を忘却することは格別のものなりと言へり。各觀念は自存の傾向即ち意識中に存在を維持する傾向を具へ、唯同様の傾向をもてる他觀念の現出に遭ふてのみ阻止せらるゝ傾向を有せりと想へり。故に一觀念が他觀念によりて識外に驅逐せらるゝこと容易なるべし。されば他觀念の消ゆるや、直ちに自ら再現して敢て他の補助を要せず。依之、二種の再現即ち障害の去りたる時直ちに自己の勢力を以て觀念の復現すること、及び他觀念との連絡のため意識中に觀念が間接に復現することを區別せざるべからず。直接再現は、言

は、睡眠といふ防礙力の去りたるや、前日の觀念が自ら現はるゝが如き時にあり。一觀念が全く忘却せられたるが如く思はれたる時すら全く消滅したるものとは想はれし。識阈以下に殘留し機を棄すべきあらば再現せんとするあり。記憶は其内容の曾て經驗したる周囲の事情を見れば復起すべきものなり。老年に及んでも亦死する前に當りても、壯年の記憶は醒覺すべく、久しく忘れたる觀念も自ら現はれ來るべし。非常なる悲哀は頗る明亮に過去を想起せしむ。又病者が熱の爲に平生記憶せざる事物を談じ言語を話することあるは珍らしからず。是は曩に看過せられたる觀念が變則の事情にて自ら突進するの好機を得たるものならんとの臆説もて説明し得べきのみ。吾人は意識の外に全く消滅したる觀念は、如何なるものを問はず、之を口にすること能はざるや、明々白々のことなり。吾人は個々孤立せる觀念を意識の他元素と聯合すべきなる一切の糸を知らず、茲に其感情或は某一般感覺と某觀念との連合は殊に意味なくんばあらず。若

し感情或は一般感覺が反復せられれば、観念は自ら現はれたるが如くに見ゆるべし。意識的精神作用と無意識的精神作用との親密なる連合は、吾人が明るき意識より出てざる限りは孤立せるか如く見ゆる者に對して、其素地的連合を有することを得せしむ。何故自身に就きての吾人の知識は屢、全く實驗的なるべきか。連合帯を追求すること能はずして、某観念と某感情との聯合を發見すること屢なり。然りと雖も個々の観念は個物的に不朽たるを得るものにあらず、個々の観念の獨立は其観念か観念構成の活動力の特形なることに基く、其活動は某事情の下にて精神活動力が取る所の進路の一つを表示するものなり。意識作用か睡眠のため新勢力を回復したる曉先つ最も慣れたる進路を取るべきは自然のことなるべし。奈何なる観念と雖も意識作用の通路の状態か之を好む所に配置するなくんは、保存せらるることなく、從ひて再現せらるることなし。故に内界には精神的自然系統ありて、作用の各表象の下に潜伏すなり。個々の観念は自ら保

意識は單に観念の動作する舞臺にあらず

存せらるることなく、意識作用の發達を決定すべきものなり。實に是は観念把住の條件にして、心理學の究問せざるべからざる所なり。ヘルバルト派の心理學は各観念に不朽の存在を與へ、意識作用統一なからしめぬ。夫れ意識は常に観念か生存競争すべき舞臺に止まらず。意識は自ら個々の観念によりて、又観念の中に作用するものなり。個々の観念を刻むよりは其關係連絡に注意せば、反て善く記憶し得るものなることは即ち之がためなり。観念間に合理的聯絡多ければ、観念の保存は益容易なるものとす。

七、イ。記憶心像、幻想、及び幻影。

自由なる記憶心象は常に直接的知念と直接的殘果殘像、殘音等より區別せらるゝのみならず、外因なうして現はるゝ観念所謂幻想よりも亦差別せらる。幻想は知念の如く實際の扮装をなして來るが故に、現實の知念より區別せんと、其人にとりては殆んど難きことあり。而して其現はるゝ程度には種々あり、心の錯亂したる人はおのが幻想を取りて頑固にも、實際なり

と主張すれども、或者は其見る所を以て、單に幻想に過ぎずと明知するあり。夢像に於きても幻想上に於きても生理行程は畧相似たり。即ち感納的腦中樞に於きて變化したる血液の作用、更に言はゞ自動的刺戟力に基く。此の刺戟力は醒覺の時外界の印象が腦に影響すると同方法にて感動するなり。されど夢の心象に効あるものは既に第三章八項に記したるが如く、幻想より反て幻影を以て多しとす。幻影とは客觀的印象を主觀的に誤解することなり。例へば月夜白色の手拭を見て白衣の怪物となし、海岸に横臥せる被船を見て人となすが如し。故に幻影は羈絆的觀念が知念に於ける感納元素を越えて勢力を得たるものなり。即ちaがΔを越えて勢力を得たるものなれば、aは速かにb、dに至りたるなり。幻影幻想の區別はエスキロールの初めて定めたる所なり。されど其間に交錯せる形式なきにあらず。極小度の感納印象が常に現在せざれば幻想は起るものにあらざるが故に、其差違は實際度の一點のみ。

幻影と幻想

記憶心像と幻想とに通有の點は、折々有意的に起ることと是なり。英國の某畫伯は、縦ひ三十分間なりとも側にありし人ならば、其人の心象を喚起することを得、其心象よりして其人を畫き得たりしとぞ。又時に或は其畫像と空想上の人物とを比較して省否を試みたりきと云。されども是は病理的性質によりしこと少なからざりしなるべし。夫のゲーテは閉目して頭を垂る時一の花を現出し、其花よりして隨意に新花を發生し得たりとかや。往々幻想は記憶心像となりて卒然實際の扮装を占むことあり。去れども其顯著にして人を欺きて現實の知念の如くに思はしむるは、突如として自由觀念の水平列を妨ぐる時にあり。強弱及び活氣に干して、幻想と記憶心像との差違は單に度の一點のみ。之に就きては人によりて大に相違あり。或人には記憶心像著明にして歴然たるも、或人には漠然として不明なることあり。又或る者には記憶心像が現實的知念或は幻想に接近することあり。斯る人には太

陽の記憶赫々として眼尙眩するが如くなるべし。然るに記憶上何等の者を見ること能はずして、單に前に見たる者の不明なる觀念を有する人あり。是等の人の記憶は心像とは名くべからざる程に不明なり。之に關しては天賦の關係あるのみならず、大に年齢及び修練の關係あり。騷人自然の討究者及び旅客は、抽象的問題を討究する人より遙かに明晰なる記憶心像を具ふ。通常想像と抽性的思想との反對は、現實の知念及び自由觀念の進路間、及び知覺二元素感覺及び繙絆的觀念間の反對に類似せり。

一個の判然たる記憶心像を有せざる人、必ず善良の記憶力を具へずといふべからず。記憶に畫くべからざるも、某事を經驗したることをば記憶すべし。然り、頗る強勢の感覺は凡て此方法にて記憶せらるべきものとなす。發砲急撃或は閃光は直接よりは、寧ろ間接に記憶せらる。淡泊にして微弱なる記憶すら、頗る精密なることあり。而して經驗したる事物の記述及び計算の根據を形成する力あり。

記憶は官能に由りて容易明晰等しからず。視覺を有する人には視覺上の記憶普通に緊要なり。他官能よりして明確なる觀念を得べき器能は、人毎に其發達一様ならず。或る病者は疾病以前に非常なる視覺上の記憶を保有したりしが、病中全く之を失ひ、病後には聽覺の活潑なる記憶を得たりと云ふ。人多くは嗅味の觀念を知れることなく、又明瞭の運動觀念を有する人は頗る少數なり。ガルトンの示し、如く、銳き視覺と視覺上の記憶とは常に並行するものにあらず。

幻形及び夢像が官能知念及び幻想間に一致するが如く、又頗る強明なる記憶心像が幻想に接するが如く、一方には官能知念及び記憶心像の間に媒介帶あり。フエヒ子ルは之を記憶の殘像と呼べり。是は直ちに官能印象の後に繼起したる記憶心像を云ふなり。活潑にして明晰なる記憶心像を有せざる人すらも、寸時記憶殘像を得ることあり。實に斯る人の記憶力は現實なる感覺に幫助を仰ぐ。是亦人毎に同じからず。通常の日光にて一物體を見たる後、フエヒ子ルは補充的殘像を得た

記憶の殘象

りしが自己の記憶を之に集注せし時、其實物の自然色を有せる(補充的) 殘果なき記憶心像之に代れりと云ふ。白地に黒き文字を見つめたる後閉目して黒地に白き文字即ち反面的殘象を得ることは人の夙經驗したる所ならん。然れども徐々と消滅し去りて終には霧の如き白色點殘存するものなり。而して之に注意せば殘果を回復することあり。是即ち殘象の記憶殘象ともいふべきものなり。記憶心象が直接官能知念より時間を去ること遠ければ、其心象は活躍せる性質を得ること益困難となる。

ロ。現實なる經驗の事情に規定せられたる記憶。

記憶心像の保存及び復起に恰好なる條件に關して、次の三事情あり。
一、元來の經驗が起りたる事情。二、其再現間の事情。三、記憶其者の性質これなり。
記憶の生理的發表は受得したる印象の痕跡を保存すべき有機體の勢力にあるものなれば、生活行程が一般に新鮮にして勢力あらば、事物は

益克く記憶せらるべきや瞭然たり。更に言はゞ官能的知念が深甚なる痕跡を殘留すべきこと明々白々のことなりとす。是則ち小兒及び少年の時期が事物を學ぶに恰好なる所以、幼少の際の經驗が後年の經驗に比して明かに保存せらるゝ所以なり。從ひて老年は幼少の際の事變を記憶すること深くして、後年に起りたるものを忘却する所以なり。是腦の行程が新印象を保存すべき勢力を失ひたればなり。後年の得識が消解することの迅速なるは生理上の通則たり。
非常に心氣爽快なる時學習したる物及び經驗したる事は、疲勞して心氣不快なる時に學習經驗したる事物に比して、保存せらるゝこと容易なり。中風及び癩癩の場合に於ても、往々老年に於けるが如き同様の事情顯はることあり。即ち夙時の記憶が保存せられて、後年の者が消散することあり。疲勞を以て軋める時は、心意が記憶の材料を蒐集すべき時機にあらず。

時間及び反復は記憶の明確に關くかべらず。速かに領有せられたる

者は、通例急かに失はるゝものなり。俗に所謂俄か勉強は適當なる復習より不結果なるにあらずや。之に關して記すべき事實あり。記憶の病理的損失上第一に忘却せらるゝ言葉は、具體的個物を表示するものにして、抽象的概念及び關係の名稱が残存すること是なり。固有名稱は一般に忘却せられ易く、動詞形容詞及び代名詞之に次ぐ。クヌモールは次の事實にて之を説明して曰く、吾人は自ら言詞の助けなく人物及び事物を容易に抽出すべしと雖も、抽象的概念及び關係は單に言葉の助けによりてのみ意識中に確持せらるゝが故なりと。而して大脳外膜の細胞組織上、具體的概念を生ずるに比して抽象的概念を生ずるには、許多なる行程及び聯合を要するものなれば、概念と其名稱とを連結する有機的連帶は、具體的概念の場合に於けるより、抽象的概念の場合に於て遙に數多ならざるべからず。

腦の新鮮ならざるべからざる時、即ち幼少の際に當り、記憶せらるゝ所の許多ならざるは之と衝突するが如し。然り、記憶は第三年或は第四

年頃よりして起る。プレーヤーの觀察したる所によれば、最も夙時の經驗は後年の經驗と頗る相違せり。小兒が其初年に學ぶ所即ち起臥歩行談話等は包藏せられたる修練の進路なり。苟も之を通過せば、凡て大人に普通なる經驗に導かるゝなり。斯の如くなれば、最幼の經驗と後年の經驗とは、連続及び調和を闕き、從ひて記憶中には斯る舊事變を保存する興味を有せざるなり。

他の原因も亦此結果に勝るものなり。夙時の官能知念は、渾沌として散亂せる性質を帯び善く排列組織せらるゝことなし。抑意識中に經驗を保持することの一條件は、則ち一定の秩序なり。小兒の意識中に於ては夢の意識に於けるが如く、上向流のみ卓越せるが如し。記憶活動の連結せる大脳は、此時期に於ては一般に左程の効力なきものなり（第四章四項を参照せよ）。乃ち印象は自ら記憶中に入るよりは、卒然反對運動を起す大傾向あるものなり。

ハ。再現の事情に規定せられたる記憶。宛も爽快にし

て健全なる脳が記憶の材料を蒐集するに必須なるが如く、有機體特に脳に充分なる勢力のあるべきことは、其材料の再現に必要なる一條件なり。氣分の爽快なるときは、通常の事情にて意の如くならざる記憶すら興起することあり六項を見よ。阿片及び類似の藥料を使用せば往々之と同様の結果を呈すことあり。縱ひ此の關係上反對は頗る必要なることあるべしと雖、經驗せる間に表はれたる心狀と氣分とに相應する重なる氣分及び有機的情狀に何物か他になかるべからず。之に加ふるに、抑、如何なる感覺は其瞬間に吾人の心中に刻まるべきものなるかの疑問あり。感覺の興へたる結果益強ければ、記憶心像の發生すること愈困難なり二項を参照せよ。感覺は記憶心像に關係する愈密なれば、記憶心像の獨立なる發現に干涉すること甚し。見よ、吾人は一物體に接觸せる間に色彩或は音響の記憶を有し得べしと雖、青色を經驗せる間に赤色を想起し或は他色を想起することの至難なるを。

二。觀念の性質に規定せられたる記憶。凡て吾人が經

験するものは均しく記憶に適應するものにあらず。其事にして益單純なれば消滅することも亦易く、數多の顯著なる性質をもてるものは把住せらるゝこと益確かなり。斯る理由により感情及び心狀は其連繫せる觀念によりてのみ記憶せられ、又感情その者よりは感情の振動及び遷移を想起することも容易なる所以なり。一般感覺即ち吾人感覺の漠然として不明なるものは容易に再現せらるゝことなし。吾人は斯くくの事情にて飢渴を覺えたりし事實を記憶すべきも、其飢渴の感情につきては記憶する所なし。然るに觸覺、聽覺及び視覺の如き高等官能は明晰なる記憶心像を繪與し、又記憶の世界は、盲者ならざる限りは重に視覺上の觀念によりて賑ふものとす。又關係の各員よりは其關係を記憶し、内容よりは其形態を記憶するものなり。又形態の中に於ても最も明亮に分化したるものは殊に記憶せらる。是故に空間の關係は、時間の關係より明かに記憶せられ、時間の關係は、相違の關係より判然記憶せらる。把住せらるゝこと容易なればこそ、空間の關係は

所謂記憶術の根據として使用せらるゝなれ。

八、イ、**觀念聯合の齊整**。觀念の運動に一心を任す時其發現する心像は、恰も感覺と均しく、自ら現出するが如し。此時吾人は之を産出せざるが如き感情を有すると必定なり。發現したる觀念と先行の觀念との間に反對及び相違の顯著なる場合には、觀念の發現は解明し難し。従ひて結果は原因に何等の關係なきが如し。之に加ふるに往々觀念が發願するとある突然を以てせば、物理世界に於ては因果の系列中に虚隙なしとする人々が、精神世界は變化なき法則に従ふものにあらずと主張するも、敢て驚くべきことにあらず。意識の世界が自保的孤立の全體にあらざることは既に明亮なれば、意識的及び無意識的活動間に相關作用ありと臆断するにあらずんば、以て理解すべからざるなり。心狀を産出する状態は凡て意識的觀念構成及び感情の作用の上に存するものにあらず。無意識の遺傳的氣質及び本能が其要用なる部分を占むること少なからず。されば觀者は、其結果によ

心狀を産出する状態

りて其者を知り得るのみ。此の如くなれば意識的觀念の相關作用の法則は、吾人が意識現象中の變化を理解せんと試むる時に指導たるべき發端に過ぎず。更に言はゞ、吾人が依りて以て渾沌たる經驗を排列する實驗的法則たるべきのみ。然れども審に心理的現象を試察して是等法則を建設せんとするものなれば、因果的關係の假設を更に確實にして之を見る。此關係は内界研究者が、外界研究者の如く發足すべき起點なり。而して其現象が是等法則もて十分説明せらるゝ能はざる以上は、未だ吾人の知り得ざる法則なかるべからざること、或は其關係複雑にして單純なる見解に還元するを得ざるとを論定すべきのみ。

ロ、**觀念聯合の法則**。曩に論じたる所に於て吾人は觀念の聯合を支配すべき法則に遭遇したり。奈何にして新感覺(A)が舊感覺の痕跡(a)と混淆するか、又奈何様にして反復せられたる確然たる感覺(ABCD)の連合が相應する觀念(a, b, c, d)の確固たる連合を生ずるか、即ち一觀念が喚起せられたる時、直ちに他の者を奈何やうにして喚起

する傾向を有するかを知らず、官能知覺の成長するにも亦觀念の獨立するにも自由觀念の連合の上に行はるゝものと同様の法則行はる。但後なる場合に於て各員は聯合する前に意識の獨立元素として認知せらるゝも、感覺及び羈絆觀念の聯合にては吾人は單に其結果をのみ認知す。抑官能知覺の性質が錯雜なるは唯分解によりて之を知るべきのみ。觀念の聯合は往々確固不斷にして、其元素が何なりしかを忘却せらるゝことあり。不可解的聯合の理は、意識及び觀念の先天的本來の形式に訴ふることに反對する英國學派の最鋭なる武器なり。此理は、統一一致して吾人に見ゆる者は尙々種なる元素の混合より生じたるべしといふ臆斷に據れり。故に獨斷的心理學の分解に比して、一層深く一層廣き心理分解を要する次第なり。斯る分解は一個人の現實の意識に見はるゝことなき先代よりの遺物(遺傳)によるか若くは口碑及び言語によりてたる聯合に適用せらるべきなり。

茲に一觀念 a ありとせよ、二つの方向にて他の觀念を喚起すべし。即

ち a は種類及び内容上自己に類似せる觀念 a_1, a_2, a_3, \dots を喚起すべく或は又通常其事物に接觸して見はるゝ觀念 A, B, C, D に相當する a も c, d の如しを喚び來るべし。茲に二法則、即ち類似律及び接近律(外面的關係の法則)現はれたり。性質上關係せる事物及び常に接近せる事物は意識に於て同一所に會集せるものなり。此二法則間には互に會合接觸せる過渡の形式存するを見る。

一、類似によりての觀念聯合。

(心理學的公式、 $a_1 + a_2$)

第一に記るべきものは同一(心理學的不變)の關係なり。是は感覺が觀念(羈絆的)を誘起して混合する時官能知覺上に効ある關係なり。即ち感覺が意識中に及ぼし得べきあらゆる影響の出立點は此處に存す。何となれば感覺が其后誘起し得べき情狀は如何なるべきも、又其結果は偉大なるべきも、意識に本能的認識力なかるべからざること換言せば一感覺は意識中に粘着點を有せざるべからざること第二の條件

なればなり。斯るが故に此點(2)は深遠なる作用の出立點を成せり。常に反復せられたる感覺の場合のみならず、反復せられたる自由觀念の場合に於きても、亦認識力なかるべからず。即ち前の場合に於てはAはa₁と混和し、後の場合にはaはa₂と混和す。

次に最單なる類似の連合は、種類同じき舊經驗の觀念に導く所の認識にあり。遙に人を認めんか、曩に見たる際の容貌の心像は自ら心中に現はる。又机上にある林檎は林檎の心像を誘起し、人物の肖像は看者をして人物その者を想起せしめ、更に又實際に見たるやうなる人の觀念を起さしむ。上の如くなれば對比、暗喩及び比喻てふこと生ずるなり。是即ち關係の類似にして、未開人及び幼者の意識は此連合をなすこと多し。謎、だじやれ、落し咄の如きも亦此聯合によれり。之を要するに、此法則は精神發達の一大基本にして、腦の組織及び習慣の大法は之よりして生ず。

二、全體及び部分の關係によりての觀念聯合。

(公式) $a_1 + (a_2b + c)$

類似の聯合と接近の聯合との過渡は、類似律によりて他の觀念或は感覺に喚起せられたる觀念が、其結合せる觀念群を誘起する場合にあり。即ち火(A)を視て鍛冶の觀念を起すとき、此間に在りて之を連結するものは鍛冶の火(a₂)なり。然れども鍛冶にある他の事物の心像(c)は之と共に起るべし。又性質或は行爲の觀念が、事物或は人物の觀念を起すときも之と同じく部分と全體との連合なり。即ち觀念の一群が、その一員の類似のために誘起せられたるなり。原因の觀念が結果の觀念を起し、又惑星運動の觀念が重力の觀念を起すは皆この例なり。又目的の觀念が方便の觀念を起すも、亦この聯合の一例なり。

三、接近の觀念聯合。

(公式) $a + b$

常に同一時或は同一處に現はるゝ感覺は、結合せる觀念を起すものなり。一個物の觀念が形成せらるゝは、正に此方法による。或る視覺上

の觀念黄色、嗅覺の觀念接觸の觀念匯遊、及び味の觀念が連合して一觀念林檎を作るが如し。吾人が經驗上、空間及び時間の關係の上にて共に表はれたる事物は、縦ひ孤立の全體に形成せられざるも、通常思想中に一同所に表はるべし。即ち某人に就ての觀念が、其人の家、其人の朋友等の觀念を起し、春の觀念が櫻の觀念を起し、月の觀念が嵯峨野の觀念を起し、信長の觀念が秀吉家康等の觀念を起すが如し。接近聯合の要用なる例は、事物と事物の記號とに存する連合なり。情緒及び其表出は自然に觀念もて聯合せられたり。若し恐怖といふ文字を字引に就きて見なば、戰慄の有様とか、或は顔色を失ふとかの解釋を發見せん。グリシヤ語の「フチーボス」は固と逃るゝといふ文字なれど、遂に恐怖の意味を得たり。言語は概ね斯る種類の記號にして、一個人の苦樂を感動する程の現象を見て無意的に破烈したるものが、或は又現象の發出したる音聲(雷鳴物の音、動物の鳴聲等)を無意的に模倣したるより生じたるものが、爾來相互の理解の方便として一個人の使用

したるものなり。

八、觀念聯合の根本則。

殊に人の注意を惹きたるものは

第一及び第三の二法則なり。又此二法則を還元して一法則となし、以て事を簡約せんとしたる企圖ありき。英國心理學者の傾向は久しく接近律を根本的のものとして考へ、時間、空間上の習慣的聯合もて意識中のあらゆる連合を説明せんとせり。トーマス、ホツプス及びセルムス、ミルは其人なり。是極端なる伴生學派心理學の原理にして、意識を感覺及び觀念の連鎖なりと考へたるものなれば、意識中の連合を接近即ち外部接觸なりと確信したり。彼等に取りては、類似連合は接近連合の特別なる場合に過ぎざることとなる。この觀念が自然的ならざるや明白なり。時間及び空間上離隔せるものをして會合せしむることが類似の關係によるものなりとは全く經驗に背反す。賴朝、義家及び秀吉が吾人思想中に於て會合することあるは、此三人が屢相互に比較せられたることあるを以てなり。又數學上の證據の諸階段は容易に

記憶中に存するも、是れは思想がその階段を結合したる後の事たるのみ。

類似的關係

類似連合が接近連合に溶解すべからざること上の如くなるも、接近連合は類似連合或は少なくとも直接認識力を豫想するものなり。Aが意識中に通例同一時に起るB、C、Dの觀念を興起せんがため、先づA觀念の恒一不變なることを定めざるべからず。斯くてAはaを起すべく、aは又b、c、dを勝起すべし。斯るが故に類似の關係はあらゆる觀念連合の極内の萌芽にして、接近(外部連合は類似(内部連合を豫想して行はるゝなり。机上の林檎がアダム及びイヴの觀念を勝起するは、頗る迅速に智識内の林檎を想起したる後のことなり。現實の林檎は智識内の林檎を通してアダム及びイヴの觀念と聯合したるなり。然れども心中の林檎(類似的の觀念を勝起すること極めて迅速なれば、現實の林檎は直ちにアダム及びイヴに聯合したるが如く思はれたるなり。かく接近連合の行はるゝには類似連合が根本となるものなり。唯々類

似連合の其間に行はるゝこと迅速なれば吾人の注意を脱するのみ。或日吾輩散歩せるに、山城の風景を突然而も明かに想起したることあり。委しく之を探れば、此記憶心像は空なる雲の形状によりて勝起せられたるを發見せり。是吾輩は全く別種のことを考へつゝありしも雲の形状が山の形状に類似せるが故、かくは連想の結果、遂に吾輩の著しき注意を惹きたるなり。斯る類似的聯合は認識力の如く容易に頗る迅速に結果すべきものなれば、識域に上ること稀なり。然れども此連合は、縱ひ無意識となるも、見捨て難き連帶にして、激因の精神的關係が睡眠者をして醒覺せしむる事實に關係す。

斯く類似的關係が接近聯合の根底なるも、接近連合の獨立を害ふものにあらず。單に認識すること及び同一視することのみは、觀念の作用を進歩せしむることなし。數多の材料は接近聯合によりて意識中に頗る保存せられ而して意識中に入りては、徐々に相似の理に従ひて排列せらる。各觀念連合には、三個の法則行はる。其一是求心的傾向。

其^二は^一遠^心的^傾向^{なり}。此^二個^の傾^向の^現は^るは、一^個人^の性^質及^び技^量に^従ひ^て其^度を^等お^せず。或^者は^観念^及び^知念^の材^料を^集め^んこ^とに^努め、又^或者^は出^來得^る丈^け簡^單に^して^明亮^なる^見解^に到^らん^こと^を望^む。歴^史的^探求^及び^科學^的研^究は^前な^る方^向を^指示^し、數^學的^及び^哲學^的研^究は^後な^る方^向を^取る。唯^藝術^家の^天才^のみ^は、特^殊及^び普^通の^二方^向を^統一^せし^むべ^き位^置に^あり。然^りと^雖も^二法^則が^同一^根本^則の^下に^統一^せら^るべ^き心^理學^上の^論點^あり。數^多の^感覺^及び^観念^は同^一時^或は^直接^繼續^にて^意識^中に^來る^べき^もの^なれ^ば、全^く相^隔離^して^存在^或は^殘留^する^もの^にあ^らず。相^互に^働作^し連^撃す^る方^法は、一^定時^に於^て意^識の^綜合^的活^動が^占め^たる^形式^及び^方向^に決^定せ^らる。又^一方^に於^ては^其れ^等感^覺及^び観^念は、各^自意^識の^一般^なる^狀態^に反^動す^るも^のな^り。今^就中^一個^が他^のも^のを^再現^復活^する^時、實^際に^働作^した^るも^のは^其れ^等の^あら^ゆる^観念^が屬^せる^一般^の心^狀、即^ち一^般の^活動^を再^起せ^しむ^べき^傾向^{なり}。

總計律

斯^るが^故に^あら^ゆる^観念^聯合^の極^内の^根底^は、各^心狀^及び^各精^神活^動に^現は^れて^一切^の單^一な^る元^素に^普通^の性^質を^與ふ^る統^合の^上に^探求^せら^れさ^るべ^から^ず。此^論點^より^すれば^部分^及び^全體^の聯^合は^あら^ゆる^聯合^の模^型的^形式^たる^べし。此^根本^則は^總計^の法^則と^稱せ^らる。此^論點^より^せば^類似^聯合^及び^接近^聯合^は、特^殊の^二形^式た^るを^得ず^して^相互^に融^合す^べし。何^とな^れば^孰れ^も關^係し^たる^媒介^形式^凡て^の聯^合の^模型^たる^べき^形式^を有^すれば^なり。 $(a_1 + (a_2 + b_1 + c_1))$ の^公式^を見^なば^容易^に類^似聯^合及^び接^近聯^合が^此公^式に^表は^れた^る法^則の^極端^なる^場合^なる^こと^を知^るべ^し。も^及び[、]が^其勢^力を^失ひ^て遂^に不^明亮^とな^る時[、]殘^る所^は $(a_1 + c_1)$ の^極端^なる^場合^にし^て、即^ち類^似聯^合の^公式^なり。か^くて^總計^の聯^合も^亦類^似聯^合に^還元^せら^るべ^し。共^通元^素 (a_1) 及^び (c_1) の^観念^が益^々卓^絶す^{れば}、他^元素^間の^差違^は愈^々強^明に^見は^るべ^し。是^故に^總計^は分^れて^二部^(a_1)及^び^(c_1)と^なり。而^して^聯合^は前

此邊の論點々
に對する
かれ

部を行はる。然れども其の認識が極めて迅速にして殆んど注意を惹かざる時は吾人は(+)即ち接近聯合の公式に到達す。吾人の經驗上類似及び接近の共働せざる場合は殆んど見るべからず。斯るが故に總計の法則は正に聯合の法則たり。

然れども更に一步を進めざるべからず。何となれば各心狀に特殊の性質を與へ同時に常住不變の普通元素(α)を形成するものは、重に心狀に卓越する氣分なればなり。夫れ氣分は心を規定し又心に規定せらるゝものなり。直接感覺に於ても亦觀念の運動に於ても興味及び之に規定せられたる注意は頗る肝要なる職掌をなすものなり。吾人は感覺に於けると同じく觀念の連合に於ても全く他動的のものにあらず。是故に觀念の連合は各時類似及び接近の關係によりてのみならず重なる感情によりて規定せらるゝものとす。但し吾人の氣分が中性なる際には上記の法則のみ専ら動作するものなり。實行上の一定の目的及び興味は、一定の觀念群に重みを加へざるなし。感情及び觀

觀念の反對連
合

念の連合は觀念そのものの連合より深奥なるものなり。凡て精神上の連合が觀念連合の法則に従ひて一個人の現實的經驗に基くものならば各人の意識は現在より更に透明淡泊なるべきに實際感情の加はるありて堅牢なる連合を起し甚だ錯雜のものとなるなり。人が理想的或は實行的目的に對して有せる強き感情は、人をして目的に達する方便を探らしめ、觀念群全體の間に確固たる連合の基礎を敷設せしむ。又此感情は吾人をして意識の實際的統一及び其統一が精神作用の健全に關くべからざることを思はしむるものとす。

然りと雖、知識に對する感情の影響を詳細に研究するは之を次篇に譲らん。但し一言附記すべきことあり。縦ひ反對連合は眞觀念連合の一特形として公準とせられたるも、此聯合をなす現象は自ら感情の影響によりて説明せらるべきものとす。抑、反對に運動することは感情作用の特質にして、感情は終始苦樂の反對によりて規定せられざるなし。宛も眼が一色に疲れたるとき反對の色を需むるが如く、一方に於

で緊張せば通常弛緩之に續き來るものなり。是明の觀念より暗の觀念に。大の觀念より小の觀念に至ることの必然を説明すべきものにあらずして何ぞや。

二、忘念の法則。 縦ひ忘念を以て説明に困難なるものとなし、追想を以て當然のこととなすは正當とはなすべからざるも、觀念は自ら忘却せらるるものなりとはなすべからず。セミストクルスが言へりし如く、實に吾人は記憶するを欲せざる者を記憶し、忘れんと欲する事を忘るゝ能はざるものにして、觀念も亦記憶の如く一技術に相違なし。無關係にして左程要用ならざる者は自ら消散すべしと雖も、大に關係ある觀念は、通常觀念の不随意運動が他に移轉せしめ得ざるが如き著しき經驗及び事實と聯結するものとす。且一個人の性質には斯る觀念に固有する傾向あり。茲には觀念が多少意識より驅逐せらるべき方法を略記すべし。此方法は則ち忘念の法則にして、追想の法則に反對す。

(一) 正面より直ちに觀念を制壓することの至難なるは言を待たず。忘念術とは、他の觀念もて或る觀念を制壓することをいふ。故に若し某事を忘れんとせば、自己の思想を占領する程の強明なる觀念の連鎖を探索すべし。其求むる觀念の性質(快樂或は懺悔、勞動或は空想は、一に其人の性質及び精神上の原因に基くものなり。又自修の器能は大に忘念術を行ふ方に因れり。幸なる哉、自然は技術(人工)を幫助するあり。

(二) 觀念は概ね初めより之を徐ろに制壓するが如き勢力と必用とを有する某觀念と連合す。嬰兒に或る物を指示して手を引き去るとき、兒の眼は通例其物體よりは其手の方に隨ふ。然れども其事物にして注意を惹くこと大ならんには、幼童は毫も手の成行に關係せざるべし。あゝ、是眞に教育の歴史を示す者なり。教育者の威信は初め學童を眞理に導くに缺くべからざるも、後には忘却せらるるものとす。言はゞ、機渠が家屋竣工の後に取り去らるゝが如し。家屋若し機渠を用ひる

なくして建設せらるゝを得ば、之に優ることなし。教育學并びに記憶術は余りに方便を用ひ過ぎて後日之を意識外に驅逐するに困難なることあり。

(三) 最初の觀念が全く消ゆることなく、其勝起したるもの、從屬的要素となる場合あり。讀書する時に文字は觀念及び感情の群團を惹起すべきも文字(即ち記號)自身は全く意識外に消ゆることなし。又比喩的文章に元來の意味が漠然と存在することなきにあらず。例へば凡惱の炎といふ句を見て、修辭に慣はざる人は、實際の炎といふ觀念を起すが如し。

(四) 觀念は意識の一隅より有意的に勝起せられたる全く別種の觀念(①)により、か、或はその觀念自身が起したる觀念(②)によりて制壓せらるべく、或は勝りたる觀念に從屬(③)することあるべし。茲に甲觀念その勝起したる乙觀念に對して獨立せるも、之と密結して全く一新觀念を惹起す場合あり。この公式は④なり此公式には一種の精

神的化學見はれたり、即ち二者混和して全く別種の者を作りたるは化合に類似すといふべし。肉汁といふ語は肉及び汁の二觀念を明かに識中に起すことなく、風琴火鉢其他大抵の複語は斯る化合をなすものなり。是亦一種の忘念なり。

九。單一觀念、個物觀念、及び普通觀念。

觀念の最單なる

形式は再現的的感覺なり。其複雜的にあらざる點より、之を稱して單一觀念といふ。斯る單一觀念が接近連合の律に従ひ複雜觀念を形成す。是複雜知念に一致するものにして、事物・人物・關係・及び事變に關係す。されば又個物觀念の稱あり。斯くの如く單一觀念は個物的觀念に結合せられ、頗る親密の關係をなすものとす。然れどもその個物觀念は恒に固定不易のものにあらずして、其諸元素は時々變化すべきなり。今向ひる机の觀念は種々なる單一觀念或る色及び或る堅度、形狀位置等の連合によりて形成せらるゝも、其机を見る毎に其單一觀念の配合等しからず。或は形狀の點より之を見、或は位置の點より之を

見或は色彩の點より之を見るが故に、常一方に偏せざるなし。然りと雖も余は机の觀念をもてりと言はんには、其机の觀念は机を見たる度毎に復起する普通の某點を含めるが如し。或る時間同一記憶心像を保有するに不可能なるが如く、同一個物觀念も亦毎度其形態を變ずる傾向あり。幾に超越したる元素が、次には反對律のために更に活潑なる元素に地歩を譲ることあり。然らば實際吾人は種々の經驗及び知念の反復の數よりも多く、個物及び事情の觀念を有するものなりや。又吾人の經驗する個々の知念一切に適用すべき普通即ち模型的觀念之れなきや。

注意すべき問題

此問題に答ふる困難は、一事物の完全なる各觀念が、總べての性質を具へたる事物を吾人に與へざる可らざることにあり。常に吾人の觀念は個物的に完全なる傾あり。況んや其觀念益明瞭にして愈注意を引くとあるに於てをや。然れども個物の性質は經驗毎に變ずるものなれば、吾人は一物につきて一個の觀念を有するにあらずして、數多の觀

個物の觀念に
二種あり

念を有す茲に於てか、具體的個物觀念（此光線にて看たる机、此隅より看たる机の如き）と、模型的個物觀念（他の机に對比したる甲の机）とを區別せざるべからず。さて模型的個物觀念とは如何なるものなるか。

古人は茲に存する心理學上の困難に左程意を留めざりし。然りと雖其困難は個物の觀念にあらずして、普通觀念にあり。數度吾人の經驗に表はれたる事物及び事情の觀念は、普通觀念と等しく抽象的觀念たることは未だ注意せられざりし所。一般なる机の觀念は其目撃したる種々の机に關係を有すること、宛も甲の机の觀念が種々なる甲の机の經驗に關係するが如し。普通觀念は依りて以て模型的個物觀念が形成せらるゝと同様なる行程の連続より生じ、具體的個物觀念が模型的個物觀念たらんと競争すること、種々なる個物觀念が普通觀念たらんと競争すると同じ。今三角形の心象を畫かんと欲せば、或は等脚三角形、或は不等邊三角形、或は等邊三角形を想ひ出だすが如し。其共通の

性質は實際の心象を組織するに足らざるなり。是抽象なる菓物を食ふこと能はずして、食ふ所が梨子或は桃等なるが如く、吾人は抽象なる菓物を畫く能はず。然らば心理學上實際に普通觀念なるものありや。

ポルクレーは首めて此心理學的困難に注意したる人なり。通常抽象論は無造作に、普通の性質及び法則を抽出して以て新しき抽象觀念を形造する器能を公準とせり。ロツクの如き哲學者は抽象的觀念を作る力は獨り人間の備ふる一特質なりとしたるも、ポルクレーは全く斯る觀念を否定せり。氏曰ふ運動せる身體より離れて、迅速ならざる遅緩ならざる曲線形ならざる直線形ならざる運動の抽象的觀念を形造することは、余の能はざる所なり。其他の抽象的觀念に於ても亦然り。各觀念は全く特殊の事物に關係せざるはなし。斯るが故に、摸型的普通觀念は、吾人が或る具體的個物觀念を、個物觀念の全系列の一例即ち一代表者たらしむるの義なり。従ひて一觀念の通性とは其觀念

普通觀念

が一例即ち代表者として用ひらるゝに適することに外ならざるべし。

尙問ふべきことあり、曰く一觀念が代表者と定めらるゝに至るべき心學的行程は如何。特殊の者の觀念(具體的個物觀念)の形造に接近律行はれ、摸型的個物觀念及び普通觀念の形造には類似律行はる。種々なる經驗及び種々なる個物は二三の元素を共有せざるはなし。この通有の元素は各經驗或は各個物に特殊なる元素と反對するに至るものなり。 $A = a, B = b, C = c$ を以て三個の經驗を表示するものと假想せよ。類似律に従へばなる觀念は a, b 及び b, c よりも識中數多なるべし。認識の光は就中此元素の上に落ち、 a は爲めに間斷なき明白の仁核となる。而して a, b, c は不明の元素となりて、其周圍に運動すべし。古の抽象論の誤謬は、 a が分立して代表者たるを得べしと想ふことなり。抑 a (一個或ひは數個の特性) は個物の觀念を與ふるに足らざる者なれば、或は b 或は c と連続して代表者たらざるべか

種々に觸れ
すなかれ

らず。

是は觀念その者の相關作用によりて決定せらるゝものなるが如くなりし。奈何なる場合を問はず、反復は a, b, c よりも w を數多く現出するものゆゑに、 w は遂に大勢力と不易性とを得るなり。然るに a, b, c は相衝突して不明となり了る。他元素の競争は誠闘に起るも、共通の元素は誠闘の上にある。此の如くにして特殊の性質は消滅すべく、普通性は殘存すべし。

個物の觀念(Concept)は類の觀念(Class)に併呑せらるべし。然れども斯る堆積的觀念ありとなし得べきも、それは差違の余りに甚しからざる場合に限らる。従ひて同類の觀念の合併は、必ず或る制限内に於てのみ行はるゝものとす。類の觀念論並びに古代の抽象論は、觀念の相關作用は、模型的普通觀念の形造を決定するものなりとのことを豫想しつ、然れども前に示したる如く、心の作用の他の二側面を算入することなく、觀念連合の理を説明し悉す能はざるなり。

茲に二側面とは意志と感情との(七)の本質を見よ

吾人全く他動的にして、觀念の不隨意運動のみ獨り卓絶するが如きことあり。不明瞭にして偶然なる數多の普通觀念は、全く機械的鈍化によりて造らるゝこと疑ひなし。然れども觀念の進行する方向には、人々の興味大抵存在するものなり。吾人は一定の實行的目的を有し是が方便を求め、或は一定の理論的題目を有し是が解明を求むるものなり。故に吾人の注意は希望せる方向に在る元素の周圍に集合して、其他の元素には觀念を理解するに必用なる方向を有し、而して此の注意の集合がその特殊なる元素をして強明ならしむること、宛も注意が感覺及び記憶をして強明ならしむるが如し。是は相違が著明なるにも係はらず、類似の諸點が固持せらるゝ場合にあらす。 a, b, c が凡て注意を自身に惹かんとし、而して媒介的觀念連合が隔離して目的と思想の運動を決定する動機とが十分強明なるときにのみ然り。斯るが故に(三)なる觀念の上にて重に注意せらるゝ者は w なり。吾人は隨意の三角形もて、三角形の特性を説明す。是は其三角形の特性を算入

することを避け得るが故なり。普通なる模型的概念とは、吾人が個物の概念の或る元素に注意の微弱なる余光を與へんがため、其元素に注意を凝集し得るの義なり。

然りと雖も吾人は特殊概念よりして漸次に具體的個物概念を形造し、終りに普通概念を造る者なりとするは謬見なり。奈何にして具體的個物を了解するかを知るは實に大技術にして、又數多の實行を豫想す。従ひて之に到達するには模型的なる普通概念に注意を凝集する力に到るより、一層高等なる精神發達を要す。個性とは相對的概念にして吾人の概念は斯るが故に全階級を經過したるなり。兒童及び未開人の概念は、多少抽象的にして不明なる普通の性質を有せり。蓋し彼等は個物の相違を明瞭に領解保持するとなければなり。初め領會保持せらるべきものは著るしき事物の特性に過ぎず。是稚き意識が度々失敗に遭ふことある所以なり。夫れ小兒は一特質の全部を了解するよりは、反て恣に事物を推論するものなり。各大人を呼んで父といふ

を見て知られむ。又小兒の言語は多く概念の抽象的にして且一方に偏したる性質と連關す。海馬を魚類に、蝙蝠を鳥類に分類するを見て知るべし。印度人は鐵を呼んで黒石、銅を稱して赤石といふ。ブッシマ人は歐人の旅行馬車を、白人の巨獸と呼べりしとぞ。此の如く通常事物に對する吾人の假設的概念は、其性不明瞭なるものにして事物の外形にのみ關するものとす。以て言語の根本が漠然不明にして、普通の意味有し、後漸く精確となり、特殊となるを知るべきなり。

十、言語と概念。普通概念は言語の補助なくして心中に形造保持せらるゝこと難し。知念及び概念の無差別的元素間に存する類

似連合に、加ふるに概念及び其記號間に存する接近連合を以てせざるべからず。縦ひ言語は初めより概念交通の媒介物にして、全く概念の構成及び把住の媒介物にあらざるも、亦概念の連合は言語の補助なく其點まで進むべきも、精神發達上一層の進歩をなすに言語の飲くべからざる時期なくんばあらず。

第三の場合に在り多く老人に在り
第三の場合に在り
説明する事柄を
は未開人の心
理を研究する所
に達する所
にしてリセ
といふ人は感
と云ふ観念を
有するも之を
表する詞を
有せずと云

概念構成の行程が言語より獨立せるは、次の事實に訴へて之を證明し得べし。第一に兒童が談話を覺ゆる前にも概念を有し又事物を思考すること、第二に言語の力が或る病理的情狀にて何等損害の理由なく失はること、第三には或る言語が某概念の表出を有せざることとなり。
幼き知識作用(感覺及び知覺)は一定せる言語の符號を要することなし、而して記憶心象若し全く活躍明瞭ならずんば當に名稱の必要あるべし。記憶及び概念が愈々吾人に實物を復現して直覺に接近すれば、益々言辭より獨立分離するものなり。然るに模型的普通概念に取りては、言辭は關くべからざる補助たり。何となれば敢て直覺せらるべきものあらざればなり。唯明確なる仁核は名稱によりて、其不明なる變化的周圍と混雜するを避くべきなり。眞に名稱は不可能的直覺に對する代用物といふべし。
聾者及び啞者は、縦ひ指頭にて談話するを習はざるも、身振り及び摸倣

的運動にて頗る活潑に事物及び經驗を説く。然れどもその表情の一種特別なるは、彼をして明瞭なる普通概念を形造する能はずらしむ。従ひてその普通概念は個物概念と混淆す。看よ、彼等は自己の身體を指して肉及び食物を表示し、唇に觸れて以て赤色を示すにあらずや。彼等は凡て事物がなされたる壁立つ、衣服裂けたり等特殊の方法を表し得べきも、其なざるゝことの普通概念を示すことなし。是に於てか、聽覺及び言辭の欠乏が、大に心意發達に關係する所以を悟了すべし。
十一、**概念の連合及び思想。** 概念の一定限界は名稱の表號によりて助けられ、注意の統合によりて致さるゝものにして、概念より概念に概念連合より思想本領に至る過渡をなすものなり。其關係思想本領は全く概念の不隨意運動に反對するものにあらず。其關係は二側面よりして明白なり。思想本領に行はるゝ活動は、凡て感覺、官能知覺及び概念聯合に表はれたる活動と異なるなし。但し其行はるゝや、整然たる方法にて一定の原理に従ふのみ。即ち是比較活動

にして前に基本的、羈絆的及び自由なる形態として記述したりしものなり。而して一定の原理に従ひて此活動を適用することは、觀念を連合する上に一定の興味あるが故のみ。此興味は各種の觀念連合が、よりて以て試験せらるべき某標準の探求に導くものなり。是は批判時期注意及び興味の提發を豫想するものなり。而して斯る批判時期は、無數なる材料が無意的に發見せられ假に排列せらるゝことを豫想す、單一なる稚き意識は觀念を形成する必用を感せずして、他動的に失望より失望に移るものなり。思想本領は直接現在より抽象して、一層隔りたる元素及び關係を之に算入することの力を豫想す、斯るが故に不随意に生發する用なき元素を沈壓すべき自己制裁なかるべからず、同時に殊に關係ある事物を喚起收集する積極的努力なかるべからず、思想は此點に至るまでは意志の事業たり、然れども意志は無より何物をも創造すること能はざるものにして、唯不随意に與へられたる者を形成變化し得るのみ、論理的思想は必ず批判的性質を備へ、常に觀

思想に於ける意志

念聯合の終局の條件たる類似的關係を試察計量するものなり。然りと雖も思想は一定の觀念聯合を試察するのみならず、殊に經驗と調和して新聯合を造らんと努む、實に思想は此標準を固持して、觀念連合の満足に至る迄選擇排除するものとす。此選擇は凡ての選擇の如く類似聯合即ち比較に基づき、其被選擇者は漸々標準の要求に應ずるものなり。

思想本領は觀念の不随意運動の使用せざりし方便及び形態を用ひること能はず、故に二者の差違は度の一點に過ぎず、換言せば類似的關係が傾解せらるゝ度に基つくものなり。觀念聯合が強き興味及び意識的選擇の目的となる事情は、敢て連合の法則を變更すること能はず、思想本部が是等の法則より離脱する能はざること、宛も人工の機械が自然界の法則に反すること能はざるが如し、然れども吾人は心理學的法則を目的のために使用し得ること、猶物理的法則を使用する

と異ならず。

思想本傾が意志の事業たりとは、思想の發動が常に明白なる意識もて遂行せらるるといふことにあらず。思想若し自由自在にして勢力あらんには頗る迅速に進行すべし。實際反省するとき、吾人は思想の中に沈めるものなり、更らに言はゞ、思想に制服せらるゝなり。然れども意志は反省及び自禁と同じきものにあらざるなり。吾人は自身を全く忘却することあるべく、また不正の偶然なる觀念聯合を防ぎて誤謬及び矛盾に陥るを避くるを得。實行は思想に於ても他の各活動に於けるがごとく効力あるものなり。實行が習成せらるゝ前に當りては、反對が屢制服せられざるべからざることあり。而して之に必用なる努力上、意志の努めたる職掌は歴然たり。適用せらるべき原理觀察せらるべき標準は指導的思想聯合の中心として保持せらるゝを要す。熱練したる思想家が思想の進行に全心を任ずるとき、注意の統合は少なからざるものなれども、意志の作用は潜伏せり。何となれば意志の勢力は茲に觀念運動の勢力と一致したればなり。但し困難及び反對

の現はるゝあらんには、意志は直ちに顯著たるべし。觀念聯合の標準を定むること、及び其標準が經驗と調和して其聯合に與ふる法則を明示することは論理學の事業にして、心理學の主たる所にあらず。論理學は人工的科學にして、心理學は自然的科學なり。然れども藝術は自然より生じて自然に連続せるものなり。而して確實なる觀念聯合の標準が、多少明かに不隨意的觀念聯合をなす者の理想的表出に外ならざること、心理學上より觀察せば興味あることなり。論理學は觀念連合が恒一原理を満足する程度、即ち各觀念は時間と場所とを問はず同一内容(Parallel)を有することを満足すべき程度に従ひて、その聯合を判定す。此原理はあらゆる聯合の豫想たる認識力に一致す。概念判断及び推理の論理上、此原理の必要たるや顯著たり。思想本傾の第一條件は、論すべき觀念單一の個物の或は普通の(が)確然定まれること是なり。觀念の不隨意運動に於きて、觀念の性質は不明亮にして相互に交錯すべし。一定の制限即ち定義によりて種々なる

概念の内容は確定せられ、而してその概念は概念に變更せらる。判断には二個或は數個の概念聯結せり。其一は他の者の一部、一面、或は結果を表すべきものなり。判断の根底には、判断が分解する連結的全體の概念或は知念あり。吾人は人が某方法にて動作することを目撃し或は思料して、人は善なりとの判断を下し、以て其際に人が表はしたる一定の性質を明かにす。若し判断の主者より客者、即ち断定語に移りて注意を人の概念より善の概念に轉向するも、吾人は尙人につきての概念即ち主者を去ることなし。何となれば、吾人が善といふ断定語に至ると、同時に其主者の去りたらんには、二概念の聯合は起らんやうなし。判断は主なる概念を決定するもの、換言せば分解するものにして、客なる概念は主なる概念と連合してのみ思考せらる。判断に表出したる心の作用は此の如く諸部に分たるゝなり。言語の發達上に概念及び判断が別々の形式もて表記せられざる時期あり。根本語は固と事變動作、或は事情を表はすものにして、言はゞ胎中の名題と稱すべ

主語と客語との分化

推論

きなり。この時の言語は動作の主動作その者及び動作の客を總括す。重なる概念の各部を表はすに別々の言解の必用なるは、注意が其部分に別々に向ひたる後にあり。之と同しく、幼兒の初語は胎中の名題なり。「ワン／＼」は「犬」が居る「并びに」犬が叫ぶ等を含蓄せり。斯るが故に、名題の式表は、重なる思想の統一より主たり客たる概念が分化するによりて生ず。

概念の定義及び判断の式表は、論理學に於て單に推論の冒頭に過ぎず。推論は思想本領の最も明瞭なる形式たり。一個の判断が之に依りて證明せらる。詳言せば一個或は數個の判断より演繹せらるゝなり。夫れ推論は、判断に疑念の起りて知念への直接關係によりて決定せらるゝ能はざる時に生ず。AがBに等しく、Bも亦Cに等しかれば、AはCに等しからずて否、断定は排除せらるべし。推論の證明的勢力は恒一原理にあり。見よ、 $A=B$ が適用せらるゝことなくば、推論は到底不可能ならずや。故に恒一原理が豫想せらるゝなくば、思想は進歩す

る者にあらし。従つて此原理は思想の最高法則、即ち一切の科學が據る所の公準たり。然りと雖も是は偶然の公準にあらず。あらゆる觀念連合を支ゆる所の類似關係は、理想的絶體的形式なる恒一原理に表出せらる。心理學上よりすれば、嚴正の恒一原理は某度にまで實行せらるべきのみ。是屢記したるが如く、實際絶對的の反復なるものなければなり。恒一原理は論理的抽象なり。然れども茲に猶論理學と心理學とが相接近する點ありて、論理的思想の生長が心理學に明瞭となることあり。

然るに類似關係が觀念聯合一切の豫想と認容せらるゝことなくば、論理學の本源は理解すべからざるものにして、恒一原理は全く專恣なる原理となり了らむ。何となれば、若し此原理が思想の眞性の理想的表出たらずして、知識作用のあらゆる階段に表はるゝ、不完全不明瞭の形式にて發見せられたらんには、思想は何處より標準即ち原理を由來すべきや。

恒一原理は論理的抽象なり

ミル氏の説見

スチユアート・ミルは著書論理的の系統中にて更に一步を進め、推論の理が恒一原理に基づかざることを説明せんとしつ。氏に従へば元來の推論は特殊より特殊に移るものなり。手を焼きたりし小兒が、復た火を見なば叫び出さむ。是火に伴ふ苦痛を思へばなり。此の如く小兒は特殊の一現象火より相違せる現象苦痛に推論するものなり。此推論は習慣或は本能に基づきたるものなりといふ。噫氏は小兒の推論が生ずべき一定條件を看過したり。火が前時の如く輝くことなくんば、小兒は必ず失錯すべく、前時の如くならば、復た之に手を觸るゝことなかるべし。此論にして正當ならば、是恒一原理を含めるものなり。稚き意識は度々失策したる後恒一不變の行はるゝ範圍を試みんとするに至る。觀念の不隨意運動より思想本領に至る過渡の生ずるは、凡て斯る經驗に基かざるなし。

十二。自由なる具體的個物觀念(即ち想像)の形成。
具體的個物觀念より摸型的個物觀念を通りて普通觀念に至る觀念は、

想像なる語を
廣くもて解釋
せば觀念構成
力となる

吾人をして純然たる觀念連合より思想本原に至らしむべきも、茲に又具體的個物觀念より敢て歩を進めずして新觀念の構成に至らしむる或る發達行程あり。構成作用即ち想像(狹意)は、思想と同一なる根本より發するも、進行の方向を同じうせず。此發達行程を理解せんが爲に、具體的個物觀念すら其性錯雜のものにして觀念聯合の結果たることを記憶せざるべからず。其二三の元素が他元素と交換せらるゝにより、個物觀念は異なる外觀を呈すべきなり。是は多少記憶の上に於ても起る所なり。特別の形狀の除去せられたる其位置は、吾人の注意を引かざる他元素の爲に占領せらる。主要なる形質を固持する場合に於てすら、此種の變形は吾人の注意を引かざる副位の形質に起ることあるべし。夢は更に一步を進め、固物觀念の主要なる元素を變化して經驗上決して表はれざる人物事物及び事變の觀念を創造す。未だ曾て目撃せざる人物を歴然夢むることあるを見て知るべし。

明晰に事柄を知らざる者の要點を得んとするとき、吾人は日常自由聯合の作用を使用せり。又諷語を理解する時散亂せる元素を綜めて以て一個の全體となす。機械の工夫者は一定の元素を集めて、經驗上未だ遭遇せざる全體と關係とに聯結す。科學の發明者も亦其經驗上の元素を調査して、他の經驗に適應するものを發見せんがため試にあらん限りの連合を造る。斯くて遂に一定の諸元素に順應する觀念表はるゝなり。科學的英才につき驚歎すべきものは、經驗より抽象して以て新真理を發見せんため種々なる可能を盡く精神的自由是なり。理學的想像の豫想する精神的自由てふものは、實に新聯合の上に表はるゝのみならず、契合點を發見する力、即ち錯雜なる状態の間にありて同一なる根本觀念を發見する力に表はる。斯く類似の點を領會することは、觀念聯合に働く所の接近聯合の根底にあり。即ち認識したる一事實或は一特質より出立して新しく全體の聯合を組織す。例へばニユートンが林檎の落つるを見て、惑星系統の根本則を得たるが如し。

實に自由聯合は差違の點を捨て、以て種々の元素をして新に調和せしむ。然りと雖も理學的探求に使用せらるゝ時は、此聯合は常に矯正者として異同を辨する思想本領を需要す。形式的即ち抽象的科學(論理學及び數學)は實際的即ち具體的科學(博物學及び歴史學)の根底たり、兼て其矯正者たり。科學的知識の發達は統合及び類似の發見を以て終局の目的となす。

科學的知識に使用せらるゝ間の想像は、觀念構成の行程が(正路の成就せざるがため)進行する間道なり。此間道が終りに至るまで閉塞せられざること、間やなきにあらず。若し間道の方向が經驗と一致することを示す時には、之を認容するも支障なし。従つて智識は臆説を以て終る。然れども一定經驗にかゝる關係なく、其目的とする事物が獨立の新創造にありて、稍夢幻の不隨意産出に似たる一種の自由連合あり。藝術上の想像即ち是なり。此終局の目的は、某の一定知念と契合するにあらずして、具體的個物的形式の創造に在り。(是れ科學的想像と異

なる點なりとす。此創造は實在の性質を具へざるべからざれども、敢て一定の實在と一致するを要せず。

想像の心理學的性質は、第一、是が動作する意識の程度、第二、之を支配する觀念連合の種類、第三、是が知念へ對する關係に據る。

(一)、想像が動作する明瞭なる意識の程度に關して、區別すべき三個の形式あり。想像は夢の意識の性質に近く、殆んど無意識的兼不隨意的に動作すべし。想像の上に行はるゝ心象の諸元素を識綜することは、概ね識阈以下にあるを以て、心象は完全なる外形を具へて卒然識中に發現す。即ちは無意識的行程の意識的結果なり。ゲーテは自作「ヴェルテルの悲哀」につきいへることあり。此小作を綴りたること、宛然睡遊者の如く、之を讀みて自ら驚歎せりと。詩人が往々「曾て識らざる物を吟味したり」など、言ふは珍らしきことにあらず。次に意識的結果を呈して、想像的産出力に接近せる一段あり。所謂即吟是なり。是一定の動機及び之に起されたる觀念と感情との運動が新聯合への衝

動を起したるなり。終りの一段は藝術的想像の活動にして、問題を解釋せんとする科學的企圖に多少類似する所あり。本能的創造力と、氣分の變化よりして生ずる心象の自由進化とに對比せば、二者は溶化し難き材料を一新形態に鑄造する有力なる動作をなす。詩人は學者と同しく少許の矛盾及び些少の不整合を寛容す。然れども大矛盾は、詩人が諸元素を一形態に連合することを妨ぐ。多數の人は印象を受納し諸心狀を経験するも、之を新構造の材料として使用し得べき人は實に少數なり。多數者は種々の經驗の發起するまゝに之を受領するも、詩人の想像は之を以て一個の心象を形造するまで諸經驗を試用す。

(二) 自由聯合の器能として想像は、其性質より時間及び空間に連結せる元素か或は連結し得べき元素を聯合する時に接近聯合を方便となす。想像の強弱及び活氣は、圓滿に心象を形成する力並に各種の元素を強く明かに表現する器能に基く。相像に富まざる人は心象に個物たる性質を與ふることなく、不明の形式もて現はれたる儘に之を任す。

若し一定の個物的觀念の形成せらるゝことあるも、全く固定して不變化的なり。斯るが故に藝術的想像は諸元素を其本來の聯合より離して以て、新具體的個物觀念の部分となし、軼て之を新聯合に置く。又接近聯合にて同一時に與へられたる者の聯合は、藝術的想像上莫大の力あるものなり。然るに科學の研究者は事變及び現象の繼發を以て、最も興味あるものとなせり。

藝術的(殊に詩歌的)相像は、類似聯合の有力なることもて區別せらるゝこと少なからず、微少なる指鍼即ち意味なき偶發的事變は至大なる關係の觀念を喚起するに足る。而して詩歌的想像は最小なる關係の間にすら大法則の行はるゝを發見するものにして、多少科學的想像に近似せる所あり。故にペインは類似聯合は詩人の想像に於て獨り緊要なるものなれども、畫伯及び樂師の想像には更に效なしといへり。

(三) 最單なる藝術的想像は、實在の模倣に過ぎず。個物的圓滿にて實在を理解再現することは、直覺力及び想像力が最高の發達を遂げたる

後にのみ解釋せらるべき問題たり。是藝術の寫實主義の分子にして、時には嚴格なる徹底的明察となり、時には其美術的材料に對する同情的没入となりて表はるゝものなり。此感動なくんば藝術は徒勞のみ。茲に藝術的興味は殆んど科學的興味に近し。唯其相違は前者に對して目的たるものが、後者には方便たる點にあり。

具體的個物觀念は、思想家に對して單に一符號に過ぎざれども、藝術家に對しては最高の目的たり。然りと雖も思想家も藝術家も一定の事實を本來の儘に据え置くものにあらず。凡そ藝術が實在の純然たる模倣と相違する點は、製作が作家の心の標證を具ふるにあり。抑此標證は、看者に表はるゝ作家の人品より來るにあらずして、作家が術品に附與せんとする者及び附與すべき方法を撰擇此撰擇は作家自ら知れることあり、或は知らざることあり、する事より生じ來る。されば意志の影響表はるゝこと、宛がら思想の心理に於けると同じ。而して其影響の不隨意なること、猶思想に於けるが如し。標證は、製作上藝術家

を導きたる感情に激發せられたる努力の表出たり。

丙、時間及び空間の領會。

一、時間の觀念の條件。

精神現象が時間の形式にて表はる

ゝことは、既に意識の假説的説明中に示したる所なり。變化、過渡、交代及び内部連合は意識の最要なる特質なり。時間の形式は既に是等の上に表はれたり。故に斯學は此形式にて終らざるべからず。即ち此形式はあらゆる意識的現象の上に豫想したる心理學的終局たるを以て、説明の目的たる能はざればなり。

時間(即ち一時的關係)の觀念に關しては之と異なり。この觀念は他の各觀念の如くに心理學上の歴史を有せり。諸心狀は敢て此繼續の觀念なく、相互に繼續すべし。意識が念獨立せる感覺及び觀念の系列に接近すれば、是意識の破潰に接近すると同事なり(時間の觀念が起ることを益し、意識は皆に潰崩に際してのみならず、其起源に於ても殆んど一系列となるものなり。此理によりて、時間の觀念は三歳以下の

幼兒に存在すべしとは思はれし、吾人は如何して期望及び記憶が拒絶的感覚と又天性の熱心と、經驗とが衝突するまに／＼生ずるやを知れり。茲には其要狀即ち記憶の内容が一定時間に関係することを揭示して記憶の發達を明かにすべし。

最も簡單なる意識の形態は、二情狀 a 及び b が媒介物なく相繼續する意識是なり。 a 及び b が各自獨立に意識を占領する間は、時間の觀念起ることなし。 b 現出するときは a 忘却せられ、 a 現出するときは b 忘却せらるればなり。彼より此に至る變化が同一圓形の種々なる填充と見ゆるため、何物かありて a 及び b を拘束せざるべからず。この共通の帶は a の交代に當りて變更せざる感覚及び感情に外ならず。交代變化する a 及び b に加ふるに比較的變化せざる第三元素 c なるべからず。是自我即ち意識の統一が、識中の各現象間の形式的聯合及形式的相關作用によりてのみならず、重なる感情によりても亦支持せらる、事を想起せしむ。此根本的感情は重に一般感情に規定せ

らるゝものにして、下等動物に於ては全く然り、時間を領解するに缺くべからざる豫想たり。常住的の者と變化的の者との差違即ち反對の直接領解は、單に時間の感覺に過ぎずして、時間の觀念にあらず。

二。時間の觀念の發達。

時間の領解が一層明瞭となるは、 a

b 間に媒介物の加入したる時にあり。斯くて a より b に至らんがため、意識は a を不變化的根據として、 m 及び n を經過せざるべからざるなり。然りと雖も m が a を隠蔽する程の勢力及び興味を有せざるを要す。 a は常に其重要なる點たらざるべからず。一系列の發點及び終點として a と b とを認識することは、時間の感覺の外に、時間の意識、時間の觀念の存するには缺くべからざるものなり。例へば a を餓餉の感覺 b を満足の感覺とし、 m を餓餉より満足に至る方便(食物を見ること之を得ること等たりとせよ。然る時は m 、 n の堅固なる連合生ずべく、而してリズム的交代起りて漸々意識に親密となり、容易に計算せらるゝに至る。若し心狀益増加し高等の發達をなす

に到らば、必ず常に其繼續中に於て或る標準點を定め之に依りて時の前後繼續等を計算するを要す。是故に時間の觀念は二物を含蓄す。第一は變化即ち繼續の意識にして或る常住なる感覺に對して起る者なり。第二は意識中に最も強固に保持せらるゝ其心狀の反復することにして、その認識は變化の系列上に於て或る計算及び分類をなすを得せしむるものなり。單一なる常住的感覚或は感情より、時間の觀念を有することは不可能なるべし。一個の思想に吸収せらるゝこと愈なれば、吾人の時間外に驅逐せらるゝこと益なり。然れば時間の觀念は、純然たる感覺の繼續より由來するものにあらずして、繼續の測算に到らしむべき者の必要あり。

リズム的系列其數を増し意識の之を測算することに益熟達せば、一時的連鎖の觀念が其連鎖を填充する感覺に反對すること益明亮となる。αとβとの間を填充するものは種々にして決して一定せず。例へば

a, m, n, r 或は a, n, q, r 等の如し。此間を滿したる者も亦種々な連鎖に再現すべし。例へば a, m, n, r 或は a, m, n, r の如し。而して a, m, n, r 連鎖を占領したる時間の分子の同數は種々の事情によりて a, b, c, d 等をも占領すべきなり。茲に普通なる時間の觀念の形成する條件あり。

三、時間の觀念の記號的性質。種々の方法にて填充せられたるが如く想はるゝ模型は心中に描出せらるゝことなく、あらゆる普通觀念と運命を同ふして個物觀念を要す。然れども吾人が直ちに一瞬間の中に書き出し得る時間は甚だ短小なり。吾人が短少なる時間の経過を過分に計算し、長き時間の経過を過少に計算する傾向あるは實驗の示す所なり。近來に至りては、實際の時間と計算したる時間の差違は、時間の経過が一秒四分の一なる時に一致するものなりとの事を示したり。更に斯る契合の點の數多あることを證明するに至れり。故に長き時間の標準たる時間の小區域は、種々なり。最も奇と

すべきことは、一秒四分の一の奇数の倍数が長時間中に於て精細に分解せらるゝことはなり。是は感覺の「リズム」的變化に基づきたる結果なり。繼續を計算するには短少なる某の「リズム」を用ふるものなればなり。精確なる計算は、雖ひ實行が非常に時間の感覺をして鋭敏ならしむべきも、長時間に對して到底不可能なるものなり。觀念が現在時間をも越えたる一時的連鎖を内容に有することあらんには、其内容は減縮せられざるべからず。吾人は一秒より二秒に移る過渡をのみ自ら明瞭に描出するを得。許多なる秒數を含める時間の諸部につきて、の觀念をば、唯符號的に所有すべきのみ。若し吾人が現在と呼ぶ時間と組立つる秒數を描出するが如くに明瞭に過去を記憶することあらば記憶は不可能のものとならん。故に吾人は常に思想にて測算の一標準を過去に適用せり。即ち此標準は現在及び直接未來に適用せらるゝものとは異なれり。吾人が記憶中に時間の區別を改作せんとすることは過去の復活を要するときなるのみ。本來の經驗の時間並

びに勢力が唯間接にのみ記憶せらるゝ事は、感覺の時間に関しても其強弱に關するが如し。是時間の觀念の符號的性質に基けり。明瞭なる符號的形式にて時間を表はすを得る時にのみ、時間の觀念は明亮となる。時間の直覺は唯空間の形式にて行はるべきなり。故に吾人は何れの方向にも定まりなく擴布せる一直線として時間を領解す。時間の觀念は模型的個物觀念なり。時間を觀察する時には、何時にても吾人は同一時間の諸部分を見ざるなし。そは宛も種々の方面より觀たる同一河流の如し。吾人が眠りて無意識なる時の如くそが往々隠匿することあり。如何にして時間の過ぎたるかを知らざることあり。然れども一旦注意の提發せらるゝや、吾人は直ちに消去したる時間の經過を改造す。此の如く時間は宛も一般概念が各個の場合に關係するが如くに、各時間に關係するのみならず、又吾人が一個物に對する重なる觀念が、其物の種々なる經驗に關係するが如きものなり。

四、時間の計算。

時間の觀念が心狀の變化にのみ據れる間は、

時間の計算は不精確を免かれず。之につき殊に重要なる二事情あり。経験の内容上の興味と経験したる形蹟の數と是なり。経験せられたる者の興味は頗る種々の影響を有せり。愉快なる経験は注意を一點に集め、實際の経験并びに記憶中に於て時間を短縮すめり。然れども亦興味は時間を延長することなきにあらず。吾人は無意的に内容が須要にして意味あるより、長時間の経過したらんことを推論することあるにあらずや。吾人は微弱なる記憶心象を速き時間に、強明なる記憶を近時に歸する傾きあり。経験の興味の疑問より離れて變化すること益多かれば、時間の経過すること愈迅速なるが如く覺ゆ。而も記憶中には全く之に反するが如し。又経験愈單調なれば、時間の経過益遅きが如し。記憶の中に於ては之に反するが如し。溺没或は他の原因より死の危険を免がれたる人は、數分間の中に一生の経過を覺ゆ。又ま陶然鴉片に酔ひたる人は、一夜に數千年の経過を想ふことありと云ふ。人は各自測時計をも

てるものなり。是は一部以て生活を過せしたる多少有力なる興味により、一部其人の觀念が運動するに慣れたる速力に因る。興味少なき内容及び緩慢なる動作は、疲勞と退屈とを生ず。

客觀的測時計を主觀的のものに代用する必要は、夙に感せられぬ。規則正しく循環する自然の大現象は、其巧なる測時の圖形を興へたり。太陽及び月の運動、晝及び夜、朝時、日中、及び晩景は又其基底たり。精密なる區劃に對しては、秒時計或は燭火用ひられつ。然れども更に精細なる計算は、錘子及び「クロノスコープ」によりて行はれたり。ホエトス・トーンは電華の割合を計りて、一分時の $\frac{1}{115,200}$ たるを知りぬ。シエメンの「クロノスコープ」を用ふれば、一秒時の $\frac{1}{1000,000}$ すらも猶克く之を計ることを得。

五、空間の形態は本來的なるか。時間の形態が意識の發端より表はるゝは疑ふべくもあらず。故に時間を心理學的に試察することは、時間の觀念及び時間の計算に關したるのみ。然るに時間の形

態が本來的なりや否やは論すべきの點なり。空間の形態が時間の形態の如くに親密なる關係を意識に有せざることは意識の通性よりして之を知る。意識の状態は時間上相互に繼續するものなれば、空間に擴布せりといふべき謂はれなし。空間の形態にて表はるゝものは意識の目的物たるを得べきも、意識その者たるを得ず。是則ち心理學上より看れば、時間の形態が空間の形態に比して遙に本來的なることを示すものにして、後者は全然意識に要なきが如し。茲には實際空間の形態が一般の心理學的法則に従ひて造られたる精神的産物なることを經驗が教示することありや否やを問はんとす。此の如くなれば意識の發達上には感覺及び觀念が單に明瞭と性質とを以て表はれ、敢て廣がりたる心象の形ある内容を有せざる時期ありしならん。然れども空間の概念なくして意識を思料するは吾人の至難とする所なり。吾人は恒に形象もて考想するものなれば、直覺及び物象の補助なくんば、氣分と感情とを明亮に概念表白すること能はず。之を以て、空間の

形式は本來的ならざるべからざることゝなるべし。記號は記號もて表はされたる者に比して、吾人に近接し、空間の直覺は時間の直覺より本來的なるが如く見ゆるなるべし。アルベルト・ラングは全く此の結論に到りて曰く、内部情狀の實驗的知覺は、正に時間の形式のみにて達する能はず。吾人は常に同一時に諸感覺を有すべし、而して是等は空間的形象の形式にてのみ綜合せらるゝものなり。凡て時間の實驗的觀念は空間の觀念と聯合す。線は時間の進行を表號するものにして、空間の運動は時間の計算に方便を與ふ。故に時間の觀念は全く空間の觀念に副ふものなりと言ふを得ざるかど。之に答へんとすれば、空間の觀念は時間の觀念及び計算の高等なる發達に予想せられたるものなれば、必ずしも本來的ならざることを観察せざるべからず。ラングは表號的觀念の必要より、過分に推理したるものなり。縦ひ名稱は其明亮精確には闕くべからざるも、思想は名稱より本來的ならざるべからず。空間の形式が凡て肝要なる職掌を主るは、視官及び觸官に於

きてのみ、聴官、嗅官及び味官には元來部位を定むることなく、唯感覺の區別及び性質あるに過ぎず。實際に空間の直覺は、視官上の感覺と連繫せり。視覺心象は觀念世界にありて頗る大なる役目をなすこと、吾人がそれ等心象より抽象すること能はざる程なり。益々注意を聽覺、味覺及び嗅覺の印象に向けなば、吾人は時間の形式をのみ具へたる意識に接近すること愈にして、空間に結合せざる内部變化を識中に有し得ることを知覺するに至る。

是は感情の心狀に關して更に顯著となす。實に感情の心狀は、大概部位の感覺胸中或は心臓中に伴はれたり。然れども内部觀察にて、現實の感情及び其有機的結果を區別すること難きにあらず。快樂及び苦痛、歡喜及び悲哀、希望及び恐怖は敢て表記せられざるも、心中に攪亂すべし。縦ひ感情の明白なる概念には空間的形象を要すべきも、其形像の表白する者は感情にあらずして、其發作或は其結果たり。歡樂の概念は、多く爽快なる者の概念に在り。然れども情緒烈ければ、凡て斯

る表號的形象を鎮壓すること甚し。感情は形態及び表白の探求に吾人を驅るものなれば、感情その者は敢て空間の形式に排列せるものにあらず。其他種々なる意識の元素は之を同一時に經驗し得べけれども、空間の形式に排置せらるゝものにあらず。心理學上の直接知覺が明亮を闕くは、大に此事實と連繫す。吾人は同一時の外界現象に對して直覺の形式を有すれども、同一時なる内界現象に對しては、憾むらくは之を闕けり。

六。距離の知覺は本來的なるか。吾人が空間を概念するに三廣表によりてなり。即ち上下、左右、前後是なり。此三者は復距離(深さ)及び表面の二者に還元せらるべし。

距離の概念が、一個の感覺に其源を基する能はざるや瞭然たり。心理學上よりすれば、各感覺は物理的刺戟が官能機關に達することを豫想するものなり。然れども距離は、自ら心中に物理的印象を刻むことなし。又は一物體より其人に至る線を以て距離を計算すれども、奈何な

る刺戟も直ちに此線の存在を告知することなし。其線は刺戟の方向を指示するものなれども、自ら感覺を起すものにあらず。吾人は其方法にて、斯る線を計算し、以て距離を了解す。然れども其計算は一個の感覺にあらずして、比較の行程なり。此行程は空間の某觀念を含めるものか、或は我身を物體に接近する時有する感覺の程度及び種類に基くものなり。

吾人が物體を領會する時には常に運動によりて之をなす。眼は光線の刺戟が黄點に落ち來らんやうに、無意的に動く。物體吾人に近ければ、水晶體は愈凸出す。近き物體を見んとすれば、眼は内部に附着せる筋肉によりて、内方に轉向し、視線を遠方に放たば、眼は外部なる眼筋によりて、外方に轉向す。種々雑多なる方法にて吾人は運動感覺を受納し、而してその感覺は吾人に對する物體の位置と連繫せざるなし。かくて運動感覺物體を明劃に領會するには、闕くべからざる豫想は、聯合或は習慣によりて、物體の感觸或は外見と連結するに至る。距離の了

解が近き外物に對して平易にして、遠き物に對して固難なることは之か爲なり。空間の頗る平易なる領會は、吾人が手を以て直ちに計算し得たる外物より之を得べく、甚大なる距離時間の大部分の如きものは直接に計算し得べき小距離の總額と考へられ、唯記號的にのみ理解せらるゝなり。

運動感覺及び觸官は其活動と連繫して、距離を了解するに、元來の基礎をなす。物體を眞に計算するは、自動的に之に觸れたる時にあり。吾人は斯くの如くして學びたる距離を、常に精神的に讀みて、視官に小さく見はれたる遠き物を觸官に感すべき丈の大きさに計算す。斯くて視官に表はれたる已知の物體の大きさは距離を計算する一方便となる。此學理はホルクレイの首唱したるものにして、新生の兒及び生來盲にして後日視覺を得たる人に施したる觀察によりて確定せられぬ。假令嬰兒は夙時より光線に向ふとも、直ちに距離を領會すること稀なり。兩眼の運動は通例相一致せざるが故に、視軸は最初領會の目的たる點

に契合せず。又距離の了解が生來の機制に基きて速かに活動するに到るものならんには、兩眼の運動が斯くなすべきことは避くべからざる豫想たり。然れども眼の調和に達したる後に於てすら、距離の確實なる了解は之を闕くことあり。小兒が達すべからざる遠き物を追ふことあるを見て知るべし。第二年第三年に於きても、距離の測算は不完全なり。其後に於きても、猶兩眼の連合運動は麗はしく調和するに至らず。

是は新生の禽獸に於きても亦人類に於けると同様なるものなりや。スパルディングが孵化せしまゝの雞雛及び生れしまゝの小豚に行ひたる實驗は、是等の動物が忽ち誤りなく其食物を發見し得ることを示したり。雞雛は迅速に穀物或は蟲類に、子豚は母の乳房に向ひ行きしと云。又生れたる時より眼を蔽ひたりし紐を取り去りたる後、十分間にして椅子上なる豚は、地上への距離を計算したる者、如く跪きて飛び降りしとぞ。是は距離の直接領會を示すものゝ如し。然れども是等

の事實を重んじ過ぐるなかれ。之には本能の運動が加はりたるを想へ、從て距離の領會が經驗及び實行の以前臆断せらるべきことは許容し難きことなり。人間に於ても亦然り。何程距離の領會が發生するに、容易にして迅速なるも、遺傳の勢力及び傾向の與からざるはなし。

生來盲にして後視覺を得たる人の經驗はポリクレイの建設したる學說を維持す。ウヰリアム、チェセルデンの治療したる盲者は、視覺回復後諸物目に觸れたるが如く思はれて、距離を判定すること能はざりしと。ロバート、フランツの治療したる眼病者は立方體を正方形に、圓球を平面に、方錐體を三角形に解して、觸覺によりてのみ其實物を理解せしと云。デューフォアの病者は、手の補助なくんば距離を判断し得ざりしとぞ。是等のことより判定すれば、距離の領會は視覺・接觸及び運動の感覺と其れ等の觀念と聯合よりして結果するものなり。

七、イ、表面の知覺は本來的なるか

表面的廣表に關し

て、視覚上の感覚と接觸及び運動の概念との聯合によりての空間の概念を説明せんと企圖せられたり。直達に領解せられたる者は其性質の感覚より組成せらるべく、空間の概念は其概念と其れ等感覚との混和より生ずべし。最初の視覚が單に光線及び彩色をのみ包容すと信ずるは自然的にして、新生の兒を観察して確定したる所なり。小兒は明白にして敢て目眩する程の者ならざる刺戟を探求保持せんとする者なり。事物の形式が領會せらるゝは後日にあり。個物の區劃は、接觸、知念、及び一個或は數個の機關の運動によりて認識せらる。視官の言語は、全く運動及び接觸の感覚に助けられてのみ明白となる。然るに視覚は苟も上記の感官と提携して發達したる時には、空間概念上大なる職掌をなすものなり。さて觸覺及び運動の感覚に制限せられたる盲者は明者の有する空間の直覺と類似のものを實際有するや否や。視覚ある吾人は少許の距離に於ても可視的表面として空間を思料すれども、盲者は如何して實際空間を畫き出し得るや。

エルンスト・ブライトナー記るせしことあり。其大意に曰く、視覚なくして得たる空間の概念に關し、生來の盲者につきて施したる觀察及び試驗は、余をして觸官自身が空間に關係する者を全く知らざるものなること及び事物が局部に分離せるを毫も知らざることを更に信せしめたり。余は視覚なき人は全然外界を知覺せずして、單に活動せる其物の存在するを知るのみなることを確信せり。實際盲者に對しては時間とは空間の代りをなす。盲者にとりて遠近は時間の多少に過ぎざるなり。盲者は實際事物が相互に分離して存在せることを知らざれば、若し事物及び身體の諸部が感神經に種類の異なる印象を捺するなくんば、それが一物として外界に存し唯、繼續的に來り接するものと思ふなるべし。自己の身體に於て頭部と足部とを區別するは、其距離によりて之をなすにあらずして、其部分の二三ヶ所にて經驗したる感覚の相違と又其時間とによりてのみ。同様の方法にて全く觸官上の印象もて物體の形式を區別すなり。即ち立體は其角隅と側面とにより、平方

と相違せる觸覺を起すべし。」

暗中に歩を進むるときは、吾人も亦盲者の空間に接近すべし。唯視覺的空間が既に備はりて、接觸及び運動の感覺が吾人の解釋を助くるに至るべきのみ。又注意を舌に集めて舌の供する空間の傾會を觀察する時は之と同様のものなり。蓋し舌は盲人の如くなればなり。但し舌は其周圍を熟知せることたゞならず。

ロ。同一時の印象。

茲に亦空間傾會の原造を主張すべき

一方法あり。抑運動感覺は常に繼續的なるも吾人は觸官もて種々の印象を同一時に受くるを得而して種々なる光線は網膜上に時を同ふして落つるを得べし。偕て此事は吾人をして、刺戟を空間に排列したるものとして直ちに傾會せしめざるものなりや。兎に角しか想像するは必要なるがごとし。何となれば色の感覺は實際色とりたる表面の感覺を意味するものなればなり。若し色とりたる物體が僅に數學上の點に過ぎざらんには、何等の刺戟を與ふることなかるべし。縦ひ

大なる物體は視官及び觸官の運動によりてのみ了解せらるゝも、猶小なる物體は繼續的行程なく直ちに傾會せらるべしと思考するを得む。二十錢銀貨の印象と一厘銅貨の印象との間には直接の區別なかるべからず。故に小なる表面の傾會は最小度なるべし。是固有性論空間傾會の本來なることを主唱する學説が頼むところの終局の城砦たり。吾人が打絶えず光線及び接觸の同一時感覺の群團を受納保持すること、及び之を直に空間に排列せるものとして知覺することは否むべからざる所なり。然るに幼稚の意識が同様の知覺を有すことは判然せず。同一時印象の大に變化あることは寧ろ初めは集合體として奏効すべし。即ち渾沌なる一感覺を與ふるなるべし。而して印象の性質及び強弱が速かに區別せらるゝことなきが如くに、空間の關係は初めより正當に傾會せらるゝなくして印象の大量の中に潜めるならん。前項與へたるプラトナーよりの援句は之を證す。何となれば歴に印象の性質的差違のみが盲者をして、自己と同じからざる種々の現象を

認識せしむることを明示したればなり。之をウェーバーの實驗に徴するも亦然り。氏は全手を湯中に投入したる時は、一指を投入したる時より温度を覺ゆることの高きを言へり。手と指との間に生來差違の觀念ありとなすを得ざるが故に、此強弱の差は初め唯外面的のことなるべし。

同一時に受けたる印象を純ら他動的に領會することは瞬間のみ。活動忽ち發起して、眼が表面を沿ふて進むにあらずんば、手は必ず之に觸る。かくて俄に同一時的は繼續的となり、直覺的は議論的となる。吾人は静止せる物體よりは、運動せる物體を解すること迅速にして又容易なり。皮膚に於ける繼續的の二刺戟は、同一時の二刺戟より其間差少なるも善く之を區別すべし。下等動物及び新生の兒は同一時の相違を認むることなしと雖も、繼續的差違變化を了解す本章の甲部を見よ。事物は運動によりて發見領會せらるゝなくんば、注意を惹くことなし。故に最初の渾沌たる感覺は、繼續的感覺の連鎖によりて決定せ

らるべし。従ひて此の場合には運動感覺重要な職掌を務む。

是に於て繼續的兼非直覺的領會が眞に空間を了解するに須要の豫想たるを知る。空間は關係を意義す。空間に在る事物とは其物が他の事物に關係して多少の反對を占むることの義なり。十全の統一として一般に空間を叙述するよりは、反て位置といふ更に基本的の概念を用ふるに如かず。然れば空間の領會は、比較或は連合に基くこと瞭然たり。故に空間は最初より賦與せられたるものにあらずして、或る心理的活動を豫料す。

ハ。局部徽號

身體の何れの部分が外來の刺戟と出遭するやは無關係のことにあらず。吾人が自己の身體并に周囲の外界を知るに至るは繼續的經驗によりてなるが故に、吾人は素より刺戟が落つる部分を感じするものにあらざるなり。若し刺戟が種々の部分に様々に働かんには、其差違は單に感覺の性質的決定として意識に現はるゝのみ。或る一定點に落つる刺戟より感覺の被むる特殊の性質を呼

ロツツエーの
局部記號

ウントの概

んで、ロツツエーは感覺の局部記號といへり。其状態は皮膚及び網膜の各點に於て同じからざるが故に、局部記號には種々變化なかるべからず。視官に關して局部記號は、光線の刺戟を黃點に向けんがめに眼を動かさんとする運動の衝動(各點同じからずか(ロツツエー)或は網膜の諸部に於ける感覺の諸性質(ウント)に存するものなり。觸官に關してロツツエーは、種々の副位的感覺に局部記號を發見しつ。副位的感覺とは、同一接觸が皮膚の密粗の不同及び下層の不同のために起す所のものなり。

今Aなる刺戟が黃點を去る網膜上の某點に落ちて、吾人の注意を惹けり。と假想せよ。眼はAを黃點に受けんとして運動せん。此運動に應じて運動感覺生ずべし。今之を α とせん。又Aが網膜上の別點に落ちたる時を想像せよ。然る時は前と同様に運動感覺生ずべし。今之を β とせむ。是に於て α と β とを比較せば、刺戟の落ちたる點の不同なるより結果する意識的差違は傾會せらるべし。又若しBが

前にAの ちたる點に來りたらんには、それは同じ運動感覺もて連合せん。 α 及び β の間には類似てふこと起るべし。此方法にて局部的關係に相應する意識は徐ろに形成せらるべし。

是等の局部記號は、初め繼續的傾會によりてのみ奏效すべし。意識は俄に是等を経験すること能はざるものなり。全連鎖の通過したる後にのみ、各感覺は局部記號を以て一定の場所に任命せらる。故に若し其れ等感覺の決定が完全ならば、局部記號は系統を組成すべし。而して皮膚或は網膜の一點に於ける刺戟は、局部記號の全連鎖を再び通過せざるも、部位を決定するに至るべし。蓋し種々なる感覺或は觀念の系列を屢々通過したる場合に於けるが如くに、實行の結果全系列が終に直覺の目的物と見ゆるに至ればなり。

八、固有性論及び發生論。

上來の説明にも係はらず、實際の空間傾會は未だ解明せられざるなり。運動感覺、局部記號及び光線接觸の感覺が聯合の諸法則に従ひ、連合して團結をなす。然れども此排

列は實に形象の直覺を起すべきものなれど、未だ整然たらず。蓋し是等の感覺は凡べて内包的の者にして、外延的のものにあらざればなり。所謂固有性論は、空間傾會を以て最原的印象と共に生ずるものと思へり。之に従へば、空間傾會の發達を心理學上より説明するは不要となる。是其傾會は先天的のものと承認せざるべからざればなり。然れども幾に引きたる實驗六、七、(イ)及び(ロ)は、全く此説と衝突するに似たり。局位を定め及び空間を傾會するに、不完全と誤謬とあるは、實際此説と矛盾せり。然れども空間の傾會を以て經驗の結果となさば、其不完全と誤謬とは容易に説明せらるべし。此理により發性論は、空間を心理學的成果となし、觀念聯合の通則に従ひ内包的感覺の聯合によりて誘起せられたるものとせり。然れども猶一の説明すべき者殘れり。此心理學的成果は其元素の所有せざる性質を有すればなり。即ち外延的^〇形式^〇是なり。

外延的形式

吾人が感覺系列の再現を始むることが何れの方角よりするも毫も關

係なき時、空間の直覺は形成せらる(何となれば時間は單に一方角を有するも、時間は種々の方角を有すればなり)と言ひて、繼續的激因の傾會より、擴張せる者の直覺に至る過渡を、説明せんと企てたる者ありき。然れども此方法にて到達すべき頂點は、時間上(俱在)にありて、空間上にあらざるべし。而して音響の系列は敢て空間中の同一處に排列せらる、なく前後に反復せらるべし。故に變形^〇てふことを許容するを要す。元素の有せざる性質をもてる複合物を生ずる化學的聯合に類似せる、精神的綜合ありとせざるべからず。

縦ひ接觸目撃すべき極小點を擴張せる者として傾會することありとするも、猶綜合を臆定する必要を見む。何となれば吾人の空間的心象は、連綿とし間斷なきものなるに、網膜或は皮膚の表面は何れも斯る連續の基本を與ふることなければなり。網膜には光線の刺戟に感應せざる盲點あり。而も視官上の心象には類似の間隙あることなし。則ち吾人は無意的に感覺系列上の虛隙を填充すなり。是故に空間傾會

は最初より賦與せられたる者にあらずとする各學説は、意識の構成本力に訴へざるべからず。空間傾會の發達に對する條件は、凡べて一個人の經驗上にて與へらるゝものなりと主唱する以上は、發生論は固有性論と全然背反せり。然れども基本的感覺と十分發達したる空間傾會とを比較せば、尙説明せられずして殘存せる者あるが故に此見解も亦信すべからず。此論が空間の本源と認むる綜合に、本能的に動作する構成本力の表出するあらば、其力の起源に關する疑問は、吾人をして一個人より自然系統に關係せしむるならむ。一個人の生涯中に一定の目的に達し難き經驗は、徐々と人類の進化間に斯る体制の適合遺傳の氣質が一個人の經驗上不完全なるものを補充するものに到るべきなり。ヘルベルト、スペンサーが初めて此所に適用したる進化説は、斯學が一個人の生活の經驗にのみ拘泥して以て到達する所より、一層進んで此問題を解釋すべき望を與へたり。

發生論と固有性論とは大差なきものなり

發生論と固有性論とが殆んど大差なきことは、下の事實より觀るを得む。一方に於ては、直ちに賦與せられたる空間の知識が、聯合によりて形成せられたる者と比較せば、無限に小なるべきこと、及び最原的感覺が實際一定の空間傾會の可能を與ふるのみなること、(スタンプ氏)が許容せられ、一方に於ては、網膜上の光線の第一激因と空間の觀念の本源との間の時間は、極めて小なるやうに既に有機體內にて準備せられたるべし(ツント氏)と認定せられたればなり。

九、空間直覺の有機的基本。 固有性論或は發生論を採用するも、一定の有機的基本の存すべきことは、空間傾會に必須の豫想たり。諸學説の衝突は、體制に規定せられたる作用は速かに動作するに至るものか或は其時間の準備及び實行を要するものなるかの一點に關せざるなし。

空間傾會の起始に要用なる有機體の組織を綿密に説明するは、感官生理學の主たる所なり。茲には中樞機制の必要なることのみ一言すべ

し。此中樞機制は、官能激因と官能の筋肉運動とに親密なる聯合を起すべきものなり。觸官に關しては視神經床視官に關しては四疊體が中樞たるが如し。是等の場所は、上記の聯合及び心理的綜合が生理的に發表する點なるに似たり。然れども大脳は又其一部に與かるものごとし。

斯く準備せられたる機器は、某動物にありては生後直ちに使用せらるべく、従つて空間傾會に必要な經驗は速かに容易に得らるゝなり。人間にありては之と異り、生後數月の後にあらざれば能はず。

十。空間の觀念。上來實際の空間形式と空間的心象とを直覺する器能を述べつ。一般なる空間の觀念、即ち模型的個物觀念としての空間の觀念は、時間の觀念と同方法にて、あらゆる個々の空間的形象及び其可能的擴布に共通なる圖形に注意を指向することに因りて發達するものなり。空間の觀念は最初制限せられたり。チェセルデンの治療したる眼病者は、自ら眼窩の制限を越えて擴布せる空間の線を描

くこと能はざりきと云ふ。又其住めりし部屋が家屋の一部たることを知れりしも、全家屋が部屋より大に見ゆるべしとは解し得ざる所なりしとぞ。是肥號的に個物の觀念を適用する力を闕けるなり。此力の發生したる時には、時間に於けると同じく空間の擴張に制限を劃すること能はざるを知るに至る。

空間(時間のもの)の無限とは、空間の各區域が偶然的のものなりとの義にして想像もて乗り踰すことを得對絶的空間。(連綿として全く無差別なるあらゆる點と部分)は心理的直覺上に對契なき數學的抽象たり。心理上の空間は相對的にして、或る一定の關係點を豫想す。而して其部分は精確なる連續及び無差別もて見はるゝことなし。吾人は空間を領解するにつき、常に多少の跳越をなさざるなし(即ち甲點より乙點に眼を走らす)。而して其内容の差違は、吾人の傾會及び直覺上空間の各部分に某の形質的差違を與ふるものなり。

丁。實在としての事物の領會。

一、**實在の表出としての知識の内容。** 感覺觀念及び概念は、意識内容の知識元素が現出して、排列せらるゝ形式なり。吾人は既に其最單の階級なる感覺の相關作用より、其最高の階級なる一定問題に指向したる、思想及び想像の活動に此排列を尋究しき。而して是等を支配する法則が全く一様なりしを見たり。感覺及び觀念の運動の不隨意なる排列より、進みて科學的思想及び藝術的想像に到る動機は、必ず經驗の増進と共に生ずる批判に在り。論理的原理及び審美的原則を建設するは心理學の任務に非ざるも、是等の原理原則は自然の心理的法則に従ひ發達する者なれば、人性と親密の關係を有するなり。感覺及び觀念の内容上、及び思想の活動が此内容に與へたる連結上に、如何様にして意識は獨立の實在を認識するや。吾人の知識は自然の心理的法則に従ひ發達するものなれば、實在に到達するものにあらず。狂者の妄想及び夢の諸象は等しく心理的法則に依るものなれば、従ひて吾人は研究の補助として屢これを使用せり。意識が内容に實在を

有して敢て夢幻を有せざることとは、如何様にして意識に現はるゝか。吾人をして目前に實在を控えたりと思はしむる或る一定の活動(知覺或は思想の發動)を指示し得ざるものなるか。

此疑問の發起するは、大に發達したる意識の立脚點に於てのみならずなるなり。意識の發端より絶えず表はれたり。一個人が隨意に自己の觀念を排列するものとはなすを得じ。人は艱難と苦痛とを供する失策もて教育せらる。最先の失錯は、可能と實際、即ち夢幻と現實との反對の基底を與ふ。

二、**實在の標準としての聯結。** 有識生物の中に夙に興起する運動の衝動は、生物をして無意に自然界中に進入せしむ。生物は某點に於て其抵抗と戰はざるべからず。而して其抵抗の感覺にて、人々は自己と異なる物の存在を發見す。人々は抵抗を征服せんと企つるならんも、決して成功することなかるべし。新障礙物は常に續々現はれ來るを以てなり。

一方より之を觀ば、各特種感覺は抵抗の感覺なり。各物理的刺戟は有機體の表面殊に特種刺戟に對する感受性の最も發達したる點に達したる時にのみ効果を及ぼす。然れども特種感官は奈何に精細なるも實在信仰の發達を助くるものにあらず。それ等は協力動作して共に會合する中心點を豫料す。此中心點は吾人が運動に對する抵抗の感覺にあり。眞に物體て、吾語は抵抗を意味す。獨逸語の物體といふ語 (Gegenstand) は吾人に對して存在するもの、義なり。

然りと雖も一個の知念は信任するに足らず。既に記し、如く、知念は常に錯綜せるものなり。これ一定感覺の誤解より起る幻影の源因なり。凡て知覺は解釋の一なり。然れども奈何して解釋の正確を保證すべきか。腦は外來の刺戟が身體に達して起したるものに類似せる情狀なる有機體中の行程にて攪起せらるべし。然れば往々正則なる官能知覺より區別せられ難き幻想誤りたる感覺及び知覺を結果す。視官及び聽官の幻想は接觸及び抵抗の幻想に到ることなしと雖も、後

者の幻想が前者の幻想を輸入することあるは著明の事實にして、是抵抗の感覺と他の感覺との關係につき陳述したる所と符合するものなり。抵抗の感覺は實在の最強なる信認を與ふるものなれば、抵抗の幻想は從て精神の健全を害するに最も有力なるものとなす。

如何様にして各場合に於て精神の疾病と其健全とを區別すべきか。若し感官一切の感覺が一致することあるのみならず、想像世界に反對して起りたるあらゆる障害物に幻想の主人が急かに且つ敏捷に應ずることあらば、何人が奈何して正否を決定すべきか。

個々の官能知念は此疑題を解くに足らず。蓋し個々の官能知念は幻影或は幻想に基くことあればなり。唯之を解き得べき方法は種々なる官能知念間の連結を觀察するに在り。抵抗の感覺が表はる、諸點は孤立するものにあらずして、相關的連絡をなす。故に人々は此關係に従ひ自己の觀念を排列すべし。適當なる排列を發見することなくんば、抵抗に逆ひて終に失望即ち苦痛を被るべし。正當なる觀念の排

列發見せられ、而も新經驗と衝突することありとせよ。最初の知念の精確に關して疑念生ず。若し疑念生せずして外界との交渉繼續せば、破壊の之に従ふこと確然たり。小兒及び狂者が生活競争より驅逐せらるゝは此理による。彼等は經驗もておのが觀念を訂正すべき位置にあらざればなり。

實在は吾人が實在と領會する者、認識せざるを得ざる者なり。此せざるを得ずておことは、消極的主觀的標準たり。夢幻は夢むる當人には實在なり。唯、醒覺の後に至りて、夢が幻影的の實在なることを悟るのみ。夢中にある限は甚しき不整合と矛盾せる經驗とにあふことなければ、夢を實在と信じて疑ふ所なし。然りと雖も最も系統のある夢幻すら、進歩的經驗が教ゆる全體に對しては、碎片たるを免かれじ。斯るが故に實在中に根ざすことなき觀念は、凡て訂正せらるゝなり。晚かれ早かれ觀念の區域は現出すべく、又吾人が自己流の哲學にて想像したる所よりは、外界に數多の事物の存在することを發見すべし。

此方法にて人々の知識は、自己の聯繫せる系統全體の形象を得て、十全となる。然りと雖も人々の力は之につき左程効果あるものにあらず。個々の人々は他の力に據ることなくば、自己の幻影を訂正すること能はず。之と等しく一國民及び一時代のなす所、亦偉大ならず。種々の人々、種々の國民、及び種々の時代のつくりたる宇宙の畫像は衝突すれども、此衝突のため、人が宇宙に對する概念は、徐々と明確に進むものなり。一個人の心理學は、一部分人種の心理學に、一部分あらゆる科學の歴史に關係す。

是は終局の目的が達し得らるゝや否やを決定することなし。之より起るべき大問題に觸るゝ前に、吾人は須要なる概念に注意を與へざるべからず。

三、因果的關係。上來の説明によれば、實在の證明は知念の確固たる連結にて與へらるゝものなり。吾人は事物及び事變の連結したる系列を信するが如くに、個々の事物及び事變の實在即ち個々の知

因果的關係

念を信仰すること能はず。事物及び事變を實在の系統に結合する確固たる帶を稱して因果的關係といふ。或る一現象が現はるゝ時必ず他の一現象が繼發するが如き方法にて、二個現象が連結する場合に於て、吾人は常に因果的關係を臆斷す。

通俗の觀念に従へば、一つは原因にして、一つは結果なり。獨立に存在せりと想はれたる事物に發見せらるべき困難は、此立脚點より容易に制服せらるべし。構成的即ち制限的勢力は、所謂原因と呼ばれたる事物に與へられつ。原因は人間の意志の努力に類似せるものを有せりとなされたり。

ダウイット、ヒュームは初めて因果の通俗的觀念をとりて批判の主題となしたる人なり。氏問ふて曰く、吾人が一物は他物の原因なりといふ時、實際如何なることを意味するや。若し原因が結果を生ずるものとせば、生ずてふことは如何なることぞ。原因力と應へざるを得ざる

原因力とは何
がと問はし原
因が結果を生
ずることなり
故に因果して
終極とし

べし。従つて吾人は圓轉するものなり。因果の關係は二事物間の必須なる連結に過ぎずとせば如何してこの必然の連結は證明せらるべきか。是は到底推論もて證明すべからず。凡て吾人の明亮なる觀念は個々別々に維持せらるべし、而して或る時は存在せざるものとして事物を畫き又或る時には存在せるものとして之を畫くとは、吾人の容易になし得る所にして、敢て原因とか或は構成力の觀念を要するなし。若し各事物その者につき觀察せば、必しも皆他の事物を豫想することなし。吾人は經驗にて因果的觀念に到ること能はず。産出力即ち原因力その者を見ることなければなり。此必要は識中に在りて、事物中に存するにあらず。然れども斯る方法にて吾人の觀念を結合するものは何者なるか。經驗の反復は、甲觀念より他觀念に到る習慣、本能、傾向を作出するものなりとは、是が唯一の説明なり。此主觀的衝動は觀念の進行中に經驗するものなれど、吾人は倒まに之を自然にありとす。

ヒュームの批判は固と原因は結果より分離せる者なりとの臆断に立てり。此く因果的關係の各員をして孤立せしむるは、氏の心理學說即ち意識を獨立觀念の系列とする學說に親密の關係を有せり。

甲が乙の原因或は結果なることは事物の概念より推論する能はずと（ヒュームに倣ひ）言はんはんに引換え、吾人は甲が乙の原因或は結果たる限りは、事物を知るものなることを主張せざるべからず。事物は常に一系統の員數として吾人に見ゆ。各事物が、一大系統をなすなくば、相互に動作すとは驚くべきが如し。ヒューム曰く、事物は原因たるも將た結果たるも變化することなしと。然れども原因たる事物は、變化が起らずんばかくあるべき情狀より相違せる情狀にあらざるべからず。抑事物は自ら變化することなくして變化を起すものにあらず。事物は獨立せるものなりといふ觀念より出立して因果的關係を怪むよりは、因果的關係を以て發足して事物は獨立せるものなりとのことを怪むこそ反て道理あるべけれ。

ヒュームは明かに因果的概念の理と知識の心理との連絡を見て曰く、吾人の内部知覺を連絡する力は、外物を連結する力と等しく覺知すべからずと。氏の心理論にして改正せらるゝ、あらば、氏の因果論も亦從つて訂正せらるべし。

相違と反對とは現象存在の條件たり（第二章五項及び第五章甲の五項を参照せよ）。新奇にして變化したる物は如何なるものを問はず吾人の知識的衝動をして運動せしむ。事物則ち現象は相違せるものとして見はるゝも理解し易しとせず。然る時は新現象を親密なる舊現象に還元し、又如何にして其新現象が他形へ轉換するやを審かにして、以て相違と反對とを制す。B現象が必ずA現象に續發する時には、吾人は實際一新方面よりAを知らんことを學ぶ。單に知覺にのみ懸着する間は、A及びBは全く相違せる者として見ゆ。雷雲及び電光は全く吾人の知覺に對しては似たるどころなし。然れども其二現象間の關係に進入せば、益々二者を抱容する連續的系統を發見すべし。電光は突

然の現象にて黒雲に何等の關係なく全く反對なるも、靄雲中に起りたる電流の發射たり。更に歩を進めなば其關係其連絡の存する所廣かるべし。蓋し雷雨の下らざる時すら、空氣は常に多少の電氣を含めるものなればなり。此の如く突然の現象は、常時には低度もて作用する者が凝集したる一形式に過ぎざるなり。原因(空氣及び雲間の電氣)及び結果(電光)は同一行程の異局のみ、其員數のみ、而して知覺上の相違より更に淵大なる系統に到る時は、相違の後蔭に近似てふことを發見すべし。

類似的關係と因果關係との連絡は、同物及び同關係が與へられたる時同結果を期望する事にも見はる。ヒュームは此期望を解きて、單に習慣の結果に過ぎずといへり。又スチユアート、ミルは無數なる經驗の概括より起れりといへり。斯くはいへ、同事物同關係が實際與へらるゝことはあらば、同結果の繼發せざるべからざるや明らかなり。若し結果が原因より全然相違せる者ならば、類似の原因は類似の結果を生ず

明治二十八年十月十五日印刷
 明治二十八年十月十八日發行

(上卷正價金七拾五錢)

版權登錄

版權
 所有

著者 石田新太郎

發行者

莊資親

東京神田區區本町六番地

印刷者

久米川治三郎

東京芝區南佐久間町三丁目十七番地

印刷所

國文社

東京京橋區宗十郎町十五番地

發行所

高等學術研究會事務所

東京神田區裏神保町六番地

陸海軍士官素養會設立趣旨

- 第一條 本會ハ陸軍士官學校、幼年學校並ニ教導團等ニ入ラントスルモノ若シクハ海軍所管學校ニ入ラントスルモノ及ヒ軍部學生又ハ現軍人ノ爲ニ必要ナル教養學科ノ資料ヲ供スルモノトス
- 第二條 本會講究科ハ軍士官學校幼年學校兵學校等ノ學科ニ準ス其目次左ノ如シ
 武育科 漢文國語科附作文法 歷史科日本、支那、朝鮮 地理科日本、支那、朝鮮
 物理化學科 數學科算術、代數、幾何、三角術 動物植物科
 生理衛生科 外國語科 圖書科
- 第三條 本會ノ講師ハ陸海軍所管學校ノ教官並當該大家ニ請ヒ各專門ノ學科ニ就キ其講義筆記ヲ刊行シ陸海軍士官候補學科講義ト題ス（毎月二回）大冊（會員ニ配附スルモノトス）
- 第四條 本會豫習期ハ十二月月サ一期トシテ第二期ヲ以テ結了スルモノトス但シ一期ノ終リ毎ニ學科修了證ヲ附與スヘシ
- 又講義錄ニハ參考科トシテ每號陸海軍所管學校入學試驗問題答案並ニ入學緊要件ヲ附スヘシ
- 第五條 本會ノ會員タルトスルモノハ何人ニテモ之ヲ許ス但シ入會金三十錢並ニ二月分以上ノ會費ヲ副ヘテ申込ムヘシ○十月三十日前ニ入會ノモノハ特ニ入會金ヲ免ス
- 第六條 本會ノ會費ハ一月月金三十錢トス
- 第七條 本會々員ニハ會員證ヲ贈リ以テ本會員タルヲ標識ス尙望ミノ者ニハ優美ナル佩用會員徽章ヲ贈ルヘシ
- 第八條 本會々員ハ講義中ノ事項ヲ質問スルヲ得ヘシ但往復郵稅等ハ自辨タルヘシ

東京市神田區裏神保町五番地

陸海軍士官素養會事務所

凱旋紀念帖

和洋折衷の美麗なる表装とし、
中判三冊甲摺紙入紙數壹千貳百頁
定價金貳圓 遞送料三十錢

征清の役や茲に本邦特有の勇武を萬國に發表し國威を寰宇に顯揚したる振古未嘗有の一大快事なり
 然るに世上未だ是が精確明亮の記事なきは吾人國民の最も遺憾とする處なり故に其由來其忠勇義
 烈龍爭虎鬪壯絶快絶の實況等を悉く網羅し嚴密に編纂し一は以て 大元帥陛下の御威徳を頌賛し奉
 り二は以て斯役の實歴家及遺族の紀念とし三は 現代國民の事業を示し益
 以て一般詳知の便に供し永く後世に傳へ傳へて
將來國民の大責任を悟了
 せしめんと今日の最大急務なりとす是本會が凱旋
 紀念帖を編纂して其筋に奉獻し並に同好の士に頒
 たんと欲する所以なり大方の君子幸に本會の微衷を賛同せよ

編纂要項 (本帖は文章平易ふりがな付)

本記 征清の由來沿革實況結果朝鮮順末等記事本末体に編纂す故に京城成歡牙山豐島平壤鳳凰
 城太孤山沖金州旅順蓋平威海衛其他各地の戰圖實況一目の明瞭に悟了し得らるべし
 傳記 征清軍人の忠勇義烈能く偉大の勳功を奏せしは宇内萬邦の贊嘆措かざる所傳記は勉めて
 確實を主とせり

23
21

奉公記

頌贊記

凱旋記

臺灣誌

眞蹟

寫眞圖

特許

人心作興の資料

發行所

陸海軍士官素養會

八
獻金恤兵義捐其他軍人以外にして當時奉公の情況を記述し其氏名を掲ぐ

陸海軍將校貴顯紳士貴夫人其他諸家の征清に關する詩文歌俳書畫等數百挿入

凱旋軍に關する各地の實況頗未並圖等を編入すべし
臺灣其他新領地の地理氣候風俗人情物産農工商漁業交通等及沿革變遷將來施設の要

項を精細詳述し緻密なる地圖を附す
眞蹟 山縣、大山、西郷、野津の四大將、伊東、川上、赤松の三中將、土方、榎本、渡邊の三大臣、東久

世、大木の二伯、大島君等眞蹟、佐野樞密、福羽子爵の序文等を各卷首に挿入す
寫眞圖 征清軍人肖像征清關係の地圖戰圖實況軍用機械物品の寫眞圖等忠勇武烈の蹟像傳の

想快絶の狀其他緻密美麗なる者殊に參謀本部測量部並海軍（此圖實に偉觀然るに本會特許
可せらる）の
人心作興の資料 たるべきものにして征清軍の頗未は之を記して大

要之本帖の目的は
小遺漏あることなし殊に戰地實歴各方面將校の校訂刪補に成れるものなれば其精確なる世間無比征

情史中諒の醇なるもの精の精なるものといふべき也
發行後二週日間に參萬餘部の購讀者に接す以て其眞價を諒すべし

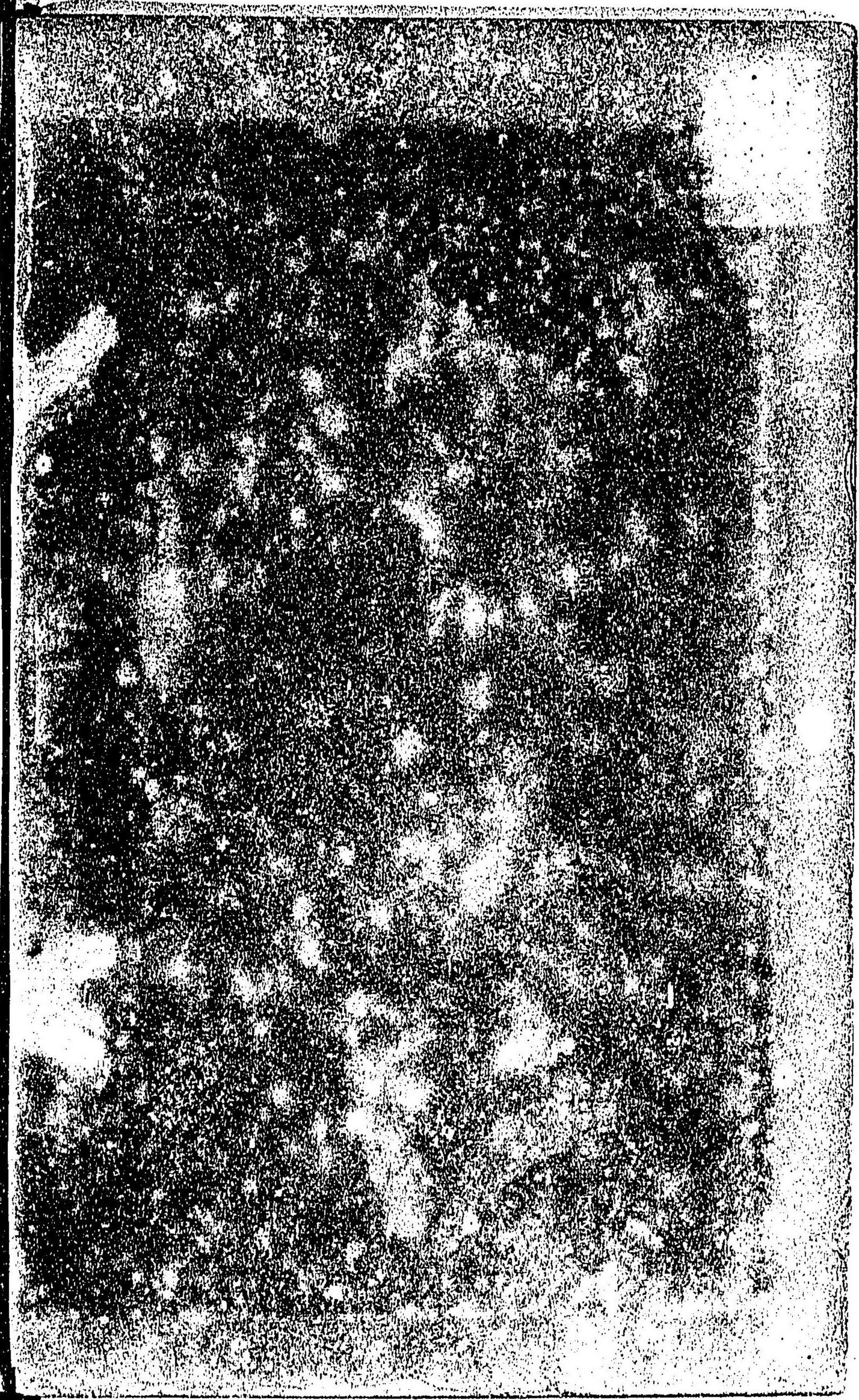
東京神田區美神保町六番地
高等學術研究會内

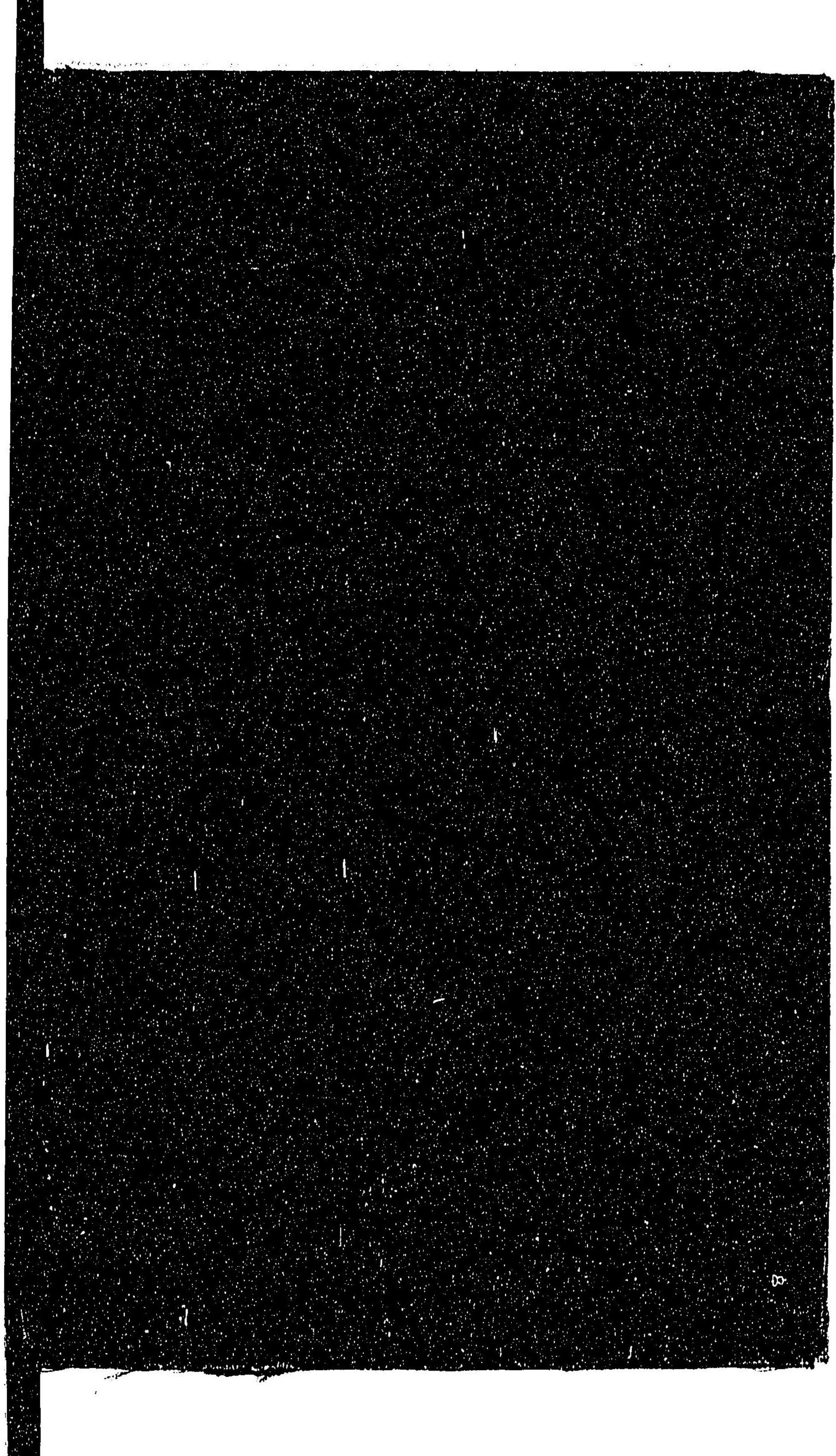
陸海軍士官素養會

45
250

43
230

— 250







012619-000-8

45-250

心理学 上卷

ハラルド・ヘフデング/著

M28

AAI-0176



